

〔資料〕

翻刻
山東京山作
『教訓乳母草紙』

柳 秀子・小粥祐子・平井 聖

Facsimile and Transcription of *Kyôkun-Menoto-no-Sôsi* by Santô Kyôzan

Hideko Yanagi, Masako Ogai and HIRAI-Kiyosi

まえがき

江戸では、江戸時代中期以降、赤本、黒本、青本、黄表紙、合巻本と呼ばれる草双紙が刊行されました。草双紙は、絵入りの小説で、伝奇性と娯楽性が強く、明治になっても刊行され続けました。式亭三馬の『浮世風呂』^{註1}には「三はん目の兄どのは又、合巻とやら申草双紙が出るたびに買ますが、葛籠にしつかり溜りました。ヤレ豊国が能の、国貞が能のと、画工の名まえまで覚えまして、それは／＼今の子どもは功者な事でございますよ。」とあり、これに対して話の相手に「私どもの幼少な時分は、鼠の嫁入や、むかし咄の赤本が此上なしでございました。」と言わせています。合巻本の挿絵のなかにも、貸し本屋が草双紙を風呂敷で背負って回る様子が描かれています。^{註2} 如何に庶民が草双紙を好んで読んだかがわかります。

合巻本は、通常、半紙判半裁二つ折りの大きさで、線装本袋綴じとし、一冊は十丁、これに表紙裏表紙をつけ、各丁はいずれも絵が七分、仮名ばかりの細かい文字の本文が三分程度の割合の板本です。

『教訓乳母草紙』^{註3} (二〇編二〇冊) は、版元江戸芝神明前三島町の喜鶴堂

佐野屋喜兵衛、著者は山東京山です。天保一五年(一八四四)春に初編が発売され、最後の一〇編が嘉永七年(一八五四)春に完結しました。著者の山東京山は、戯作者山東京伝の弟で、明和六年(一七六九)に生まれ、安政五年(一八五八)九〇歳の長寿を全うしました。京山は、文化四年(一八〇七)に三九歳で、兄京伝に勧められ、はじめての合巻『復讐妹背山物語』を書きました。その後、合巻を書き続けています。京山は、京伝没後、銀座二丁目の京伝店を引き継いでいます。^{註4}

京山は、中世に書かれた阿仏尼の『乳母草紙』が高貴な女人を対象とした心得話であったのに対して、町方の童のためになる話を書いた、と『教訓乳母草紙』初編のはしがきに述べています。初編が刊行されたのは天保一五年(一八四四)春ですが、底本として使用した平井聖架蔵本には初編下の裏表紙見返しに「嘉永二年己酉新板目録」(一八四九)があり、さらに二編の『乳母草紙跡追話』の下にも、三編下にも、初編と同じ「嘉永二年己酉新板目録」がついています。これによって、嘉永二年の後刷りであることがわかります。第三編の刊行は弘化三年(一八四六)で、その題は、『乳母草紙』となります。第四編以降は、刊記、広告の年紀から、いずれ

も初刷りであることがわかります。底本の第一編上の寸法は、縦一八・一センチ、横一一・九センチで、第一〇編までその寸法はほとんど変わりません。

内容は、若い頃御殿奉公し、後年、かつて奉公していた主人に頼まれて、その娘の婚礼に際してその嫁ぎ先に再び勤めたお清が、その勤めも終わって、孫娘たちにせがまれて語って聞かせる形式をとっています。初編は、奉公していた頃の話から始まり、その後は、女兒のための教訓話が各編に収められています。それらの話は、現代にはそのまま通用するわけではありませんが、江戸時代末の江戸における女兒教育の一端を知る手がかりになるうかと考えて取り上げることにしたのです。

今回取り上げた初編、二編、三編の内容の概要は、次の通りです。

初編上では、まず、孝感得魚和漢之駢事として、唐において、姜詩の妻の孝行に、泉がわき、汲むたびにその桶に鮒が入ったという故事に、大和国の娘いまの孝心に、水が沸き鯉がでたという『近世孝婦伝』の話を対しています。そのあと、この『教訓乳母草紙』の主人公であるお清の、一二歳ではじめての奉公から、やどさがりして結婚、そして再び勤めるまでの話が収められています。下では、お清が、かつて奉公した主人からの懇請によって再勤し、一七年の間その姫のお局を勤め、やどさがりして、髪を下ろして名を妙清とあらため、やどさがりの挨拶をするところまでが含まれています。

二編上は、鎌倉のふくとく屋万右衛門の隠居の身分となった妙清が、孫たちを前に、『譚海』巻六をもとに、自分の思いを加えて、話して聞かせる場面です。相模の国の太郎介という百姓の話で、孝行な太郎介が鎌倉に飛脚に行き、昔馴染みの隣村の甚六にめぐり会い、帰って後、甚六を頼っ

て鎌倉に出て、米屋の杵右衛門のところに米舂きとして奉公し、次第に信用を得ていく中で、糠買いのう八から五百文で赤錆びた刀を買ったところまで。下は、その刀が、応仁の乱で行方が知れなくなったたまさむねの名刀で、梅が谷の竹川殿に百五十両で買いとられたので、関係した人々に分け前を配り、残った百二十両を故郷の母に見せに行く話で、途中ごまの蠅につけられ、ごまの蠅から逃れるために預けた百二十両が妻の不倫の相手に取られ、取り返すなどの枝葉の話がついています。

三編は、イザナミノミコトが黄泉の国から逃げるとき、櫛の齒を折って投げ、筍と思わせた古事記の話をきっかけに、鎌倉の禅寺ごくらくいんで、筍泥棒と思って捕らえてみると、このものたちは筍泥棒ではなく、かけおちのふくとくやの若いもん茂介と腰元おさんでした。この二人に和尚がいろいろ論し聞かせた上で、出入りの植木屋に、ふくとくやに引取らせるために連れていかせるところまで。下は、その後のふくとくやの状況を説明した上で、二人を妙清が説教する話と、孝行者で忠義な妙清の下女お初が、ふくとくや別家とくべゑの息子とく介の嫁にと見初められて出世する話です。

なお、翻刻に当たって昭和女子大学図書館所蔵の『教訓乳母草紙』第一・二・三編と対照して、底本の虫損・汚損部分を補っています。昭和女子大学図書館所蔵本の第一・二・三編は、裏表紙見返しの新刊目録の年記から第一編上が嘉永七年、下は同六年、第二編上・下は嘉永五年、第三編上下は嘉永六年の再版と考えられます。

初刷りとの対比は、大阪府立中之島図書館および市立米沢図書館所蔵の初刷り本によって行って、その異同を翻刻文中に示していますが、修補等の関係で裏表紙の一部に未見の部分があります。該当するのは、初編上の

裏表紙見返し・裏表紙、初編下の裏表紙で、この部分の検討がいまだ出来ていません。検討に際して、大阪府立中之島図書館および市立米沢図書館には大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

『教訓乳母草紙』はこれまで翻刻が公刊されていないので、女子教育の府である昭和女子大学の紀要の上で、公にすることにしましたが、取りまとめたメンバーは、いずれも日本文学を研究対象としている専門の研究者ではありませんので、心もとないところがあります。女子教育を考える手立てとして、幕末の暮らしを知る手立てとして、少しでもお役に立てばと考えました。各方面の方々の、ご指導ご教示をお願いいたします。

この作業は、平成一六年(二〇〇四)七月に、当時図書館事務部長であった柳秀子の発意で、柳を中心に、平井聖(生活環境学科教授)、小粥祐子(国際文化研究所客員研究員)、坂田沙代・矢野綾美(生活機構研究科院生)が始めた勉強会の結果です。その後学生には出入りがあり、これまでに参加した学生として、中村友美・向後千里・岩本利恵の名を上げることが出来ます。今回の翻刻原稿を取りまとめたのは、柳・小粥・平井です。

註1 『新日本古典文学大系 86』岩波書店 一九八九

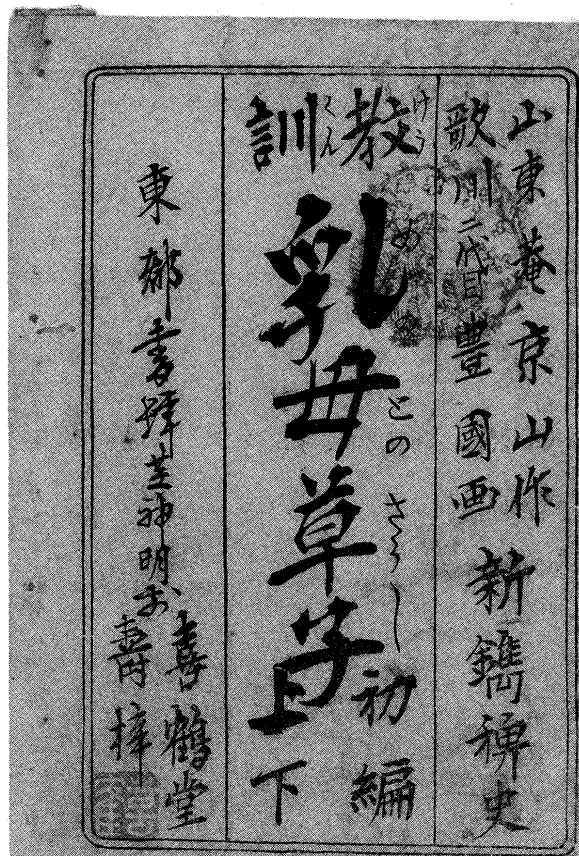
註2 山東京山『娘庭訓金鶏』(二八五〇)二編上 九丁表

註3 原本の書名表記は『教訓乳母草子』『教訓乳母の草紙』『教訓乳母草紙』などありますが、本稿では便宜上『教訓乳母草紙』と表記しています。

註4 津田真弓『山東京山年譜稿』ぺりかん社 二〇〇四

凡例

- 一 翻刻に当たって、漢字・変体仮名は通用の字体に改めている。
- 二 頁の区切りの表示は、その終わりに丁の数字と表・裏で示している。原則として、見開きごとに文章・挿絵が続いていて途中の頁の区切りを表示することが出来ないで、その場合は見開きの終わりにだけ表示している。
- 三 原文はほとんど平仮名で書かれ、句読点がないので、読みやすくするため、句読点を補い、必要と思われる箇所には、その頁(見開きの途中で頁の区切りがつけられないときは、見開きごと)の初出のところに本文右側に「へ」をつけて漢字を補っている。「へ」のないふり仮名等は、原文についているものである。
- 四 原文の漢字に続いて割註の形でついている読み、および仮名に続いて補われている漢字は、そのまま生かしている。
- 五 人物名は太字にしている。
- 六 本文中の京伝店の広告、裏表紙見返しの広告は、そのまま掲載している。
- 七 註は、該当箇所の右下に、編ごとの通し番号を算用数字で示し、編の最後にとまとめている。
- 八 原文中の○、○、●、●、▲などの記号、頁中の区切り線は出来るだけそのままにしている。
- 九 初編、二編、三編の初刷りにみられ底本で削られている部分は、その頁の翻刻部分に「」をつけて示している。
- 十 架蔵本中の虫損その他で判読できない文字は□で示し、その右側に昭和女子大学図書館所蔵本によって補った文字を、「」をつけて示している。
- 十一 印は、『』内に印記を入れ、右肩の()内に丸・角のおよその形状と黒印・朱印の別を示している。
- 十二 本文中に、現在差別用語とされている語彙が用いられているが、この翻刻の史料としての意味から、そのままにしている。利用に当たっては、その点に配慮されるよう望んでいる。



京山作
国芳画

めものとのさうし上 さのや板

応需外題
国貞画

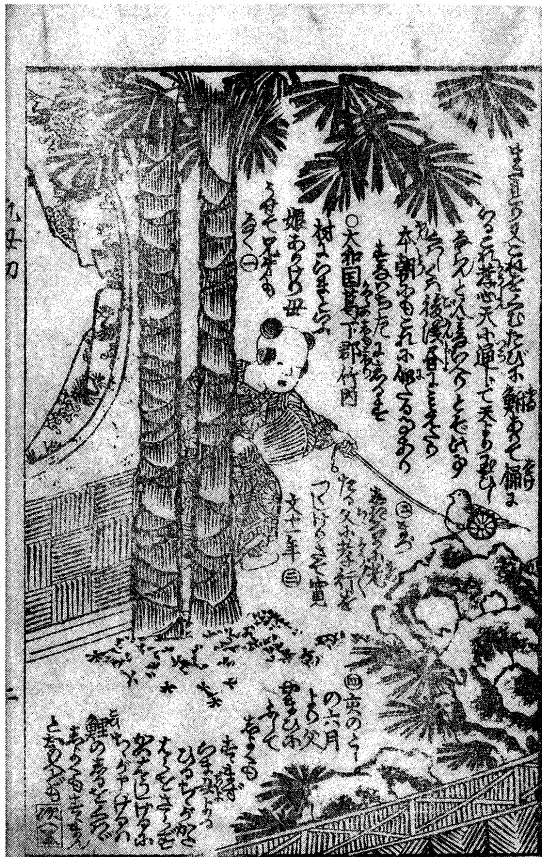
「初編上表紙

訓教 乳母草子 初編
めものとのさうし 上下

山東菴京山作 新鐫稗史
歌川二代目豊国画

東都書肆芝神明前 喜鶴堂
寿梓 (角朱印)
『喜鶴』

「初編袋



孝子
姜詩
がつま

孝感得魚和漢之駢事

かうかんうをえたるわかんのにたこと
むかし唐土に姜詩といふ人、家貧して父没し母に事て至孝也。その地水あしく
て母これをきらふゆゑ、姜詩常に江水をたくはへて母に供す。其妻水をくみおく事
母にのますにたらざるをもつて姑に事すること不孝なりとて、姜詩大に怒り妻をおひ
いだしけり。つまこれをうらみとせず、いかにもしてしうとめに不孝也といはれた
る悪名をすゝがんとしあんせしが、此しうとめ鮒のなますをこのむ。しかれども山
里なればたやすくはえがたけれど、心をつくしてふなのなますをつくり、となりの
つまをたのみてしうとめにおくる事たびくなり。姜詩これをきゝてつまをよびか
へしけるに、その日いへのかたはらに泉にはかにわきいで、その水母にのます江水
にまされり。又これをくむたびに鮒ありて桶にいる。これ孝心天に通じて天より玉
ひしならんと人みないへりとぞ。此事くはしくは後漢書にみえたり。本朝にもこれ
に似たる事あり。すなはち左にします。○大和国葛下郡竹内村にいまといふ娘
ありけり。母うせて兄弟もなく、○まづしきなかに、老たる父に孝行をつくしけ
り。さて寛文十一年○酉亥のとしの六月より父やまひにふしてしよくもすゝます、
いま女よるひるちゝが、かたはらをさらずかいほうしけるに、ちゝが申けるは鯉の
しるをくはゞしよくもすゝまんとおもへども、

次へ

二表



孝女おいま

▲此山ざとにて鯉はえがたし。あゝいかがせんとてなげきければ、いまその心を
 やすめんとていつはりていひけるは、此ほどとなり村にてこひをいけておく人あり。
 あすはいかにもしてとゝのへまゆらすべし。ちゝうちうなづきてよろこびけり。さ
 てそのよいま女は鯉をとゝのへん事、とやせんかくやおもひわづらひて目もあは
 ざりしに、よふけたるころ桶の水におとありければ、ねずみやおちたらんと火をと
 もしてをけをみるに、その水にはかにわきあがりたる。そのなかに大なる鯉あり。
 (不思議) ふしきにおもひながらうれしくて、此こひをしるにしてちゝにすゝめしに、ちゝ大
 によりこび、これよりしよくすゝみて、やまひもすらゝといえけるとぞ。貞享
 四年、(西無) ばせを大和をあんぎやしていま女が事をきゝ、京にきたりて◎ばせをが手
 習のし□やう北向雲竹にかたりけるに、うんちくかしこにいたりていま女にあはん
 (師匠) (匠) (代) (彼地) (至) (念) といひしを、◎四門人かはりていたり、いま女がすがたをうつしてかへりしに、う
 んちく、いま女がはなしをすがたゑのうへにしろしたるは、貞享四年八月十五日と
 あるよし、近世孝婦伝といふ本に見えたり。

孝女おいま

「三表



おいま父



○姜詩がつまの母に孝なるは天につうじて、泉俄に湧いで、母のこのむふなをえ、
天あついで泉俄に湧いて、母のこのむふなをえ、竹内村のむすめは父に孝をつくして桶の水に父がのぞみのこひをえたり。和漢千幾
母のこのむふなをえ、竹内村のむすめは父に孝をつくして桶の水に父がのぞみのこひをえたり。和漢千幾
桶の水に父がのぞみのこひをえたり。和漢千幾
とて、和漢千幾百年を。

○ある人いはいく、およそよのなかのよめを見るに、よき御奉公したるよめは、お
にはにありしきくらにて、えだぶりわがまゝならずすなは也。おやのひぎもとにて
わがまゝにそだち、きれいなおにはをしらざるは、えだぶりわがまゝにて、山には
えたるさくら也。よき御ほう公せざれば、かうらいべりのたゝみふんだ事なく、手
をついては、ものゝいひやうをしらず。ひたひのくしはれい義にさすものとおもひ、
べにおしるいはいろをかざるしなとばかり心え、さゝちんとはさゝやのちん八が事
かとがてんし、うちまきとはたき木とおもふ。こんれいのとき、うちかけをはじめ
てきたゆゑ、うちかけのさばきをしらず。酒あるてうしをうちかけのすそにかけて、
なかうどにひやあせをかゝせるなど、これみなよき御奉公をせざるゆゑなり。やん
ごとなきあたりにもやつかへしたるよめは、れいぎのさしきへするほど心がおちつ
きてはちをかず。どのよな目うへの人のまへ、どのよなひろいさしきへでゝも、
ばうてのする事なし。これみなありがたきおみやづかへをしたるゆゑ、その身一代
のひかりとなるなり。さればむすめには御ほう公さすべし。○よめは御ほうこう
したるをもらふべし。これ中ぐらゐの町人の事をいふなりと○ある人いはいく。そ
のためしをこゝにひくこと、左のごとし。



お小しやう
吉やのちに松
竹やのよめ

本文のほつたん

むかし、かまくらにてうとくなる町人のむすめ、とし十二にて琴はおくのゆるしを
すまし、さみせん、こきう、をとりを申たてにして、はじめてあふきがやつのか
めさまへお目見えにいでけるに、げいはもとより、うつくしきうまれなれば、みさ
をのまへさまのきよいにかなひ、二ど見にもおよばず。一日もはやくとの事にて、十
二にてやんごとなきあたりのおん身ちかくめしつかはるゝ事、二たおやのよろこび、
つねにはきせぬふりそでをひけらし、ちこわげもよくにあひて、しるべのかと
ぐへいとまごひにつれてありくも、そだてた母のはながたかし。○さて上りてか
ら名を吉やとたまはりしに、此母もむかしはよき御奉公つとめたれば、ばんじに心
がとゞき、つけど、けがよきゆゑ、おしゆびもいよくよくつとめけるが、あまり
うつくしきゆゑ十五にてげんぶくおほせつけられ、おきよと名を玉はり、ねんきめ
でたくつとめ、御礼ばうこう二年つとめ、廿五のはる御しゆびよくおいとまねがひ
のごとく玉はり、つとめてをる時よりのやくそくに、おなじかまくらにくらの五
ツもある町人松竹や梅右衛門がせがれ梅太郎がつまとぞなりける。名はつとめた名
をそのまゝにおきよとよびて心もきよく、二たおやに孝をつくし、うめ太郎を
だいじになし、①あさも両しんよりはさきへおき、五人の下女はありながら、せ
はしき時はたすけにてはたらき、ふでも見事に、ものもよくよめ、歌よむ事もお
やしきでまなびたれど口へいださず。一つとして申ぶんなければ、梅太郎がうばあ
がりのまかなひばゞのいぢわるさへ、おきよさまはよめの手本なりとほめけり。③
④これありがたき御奉公をしたるおかげなりけり。



二編初

○おきよ（嫁）め入りしてほどなくおひのい（母）はひをなし、あたる月にめでたくあん（安産）さんして、しかも玉のやうなるを（男）とこの子なれば、梅吉と名づけ二たおやはうひまことて大によるこび、きうきん（給金）はいかほどなりともよきうばをとたづねけるに、おきよしうとめにいひけるは、およそうばと申すものは、わがうみたるかあゆき子は（可愛）さにやりて人にそだてさせ、わが子にのますべき（乳）ちを人の子にのます。これ身のまづしきゆゑにせんかたなく、きうきんとるためにわが子をすてうばをつとめ、人の子をそだてる事なれば、わが子ほどかあゆきなきは人の心のつねなり。それゆゑに、その子のおやの見るまへとみぬところにて、心にうらおもてもあるはずなり。ま事のおやの心になりて、子をそだてるうばはまれなるはず也。よしあるおいへ（由）には、礼義もたゞしきゆゑ、うばがのさばる事はなけれども、町人のちゆうぐら（中位）るな（尊）くらしするいへでは、上下のさべつたゞしからぬもあるゆゑ、のさばるうばおほし。

○そののさばるわけは、ちをのませるためにわが子をうばにあづけ、うばは此子を入（買）じちにとつておくゆゑなり。よしあるおんかたはともあれ、のますべきちのありながらうばをおきてわがま（我）さするは、そのおやのおるかといふべし。

二の巻へ 一の巻より さりながら、ちのたらぬ人はうばをもおくべきが、わたくしはちがたくさん也。ことさら女は子をそだてべきためにちぶさといふものを天よりあたえ玉へば、町人ふせいがうばをおくはもつた（勿）いなし。しかるにうばをおかねば、（外聞）四ぐわいぶんあしきところろえ、又はしづがうるさきとて、うばにあづけてわが子のだきねさせ、おのれはころよくあさねをする事、ひつきやうはお（騙）ごりよりおこる事なり。人はともあれ、わたくしはいやしきうばにだいじの子を入じちにあづける心はござりませぬ。それともこれまでうばをおき玉ひたる事ならば、うばのかはりにたきもりするとしたけたる下女をおき玉へ。だきもりなればうばとちがひ、つきへ



だんなのお子
さま

おんばどの

ながやのかゝ



第二回 月日のたつた矢のつぎへ

ながやのかゝ

▲をりくはつきものでもさせますとりをわけたることばに、二たおやもつともなりとて、よめのことばにしたがひけり。○さて此よめのおきよがをつとにしたる梅太郎をそでたるうば、今はまかなひはゞとなりたるが、おきよがうばのはなしを次のまでわがはくたびをつくらひながらきいてゐたりしが、うまれた子のあづきまくらぬふてゐる下女にむかひ、「おきよさまがうばのおはなしにちがひなし。わたしもわかだんなにちゝをあげたとき、たいどくにはわるとて、わたしばかりかるいさかなくだされたが、まぐろがたべたくてならぬゆゑ、おで入りするかるこのうちでまぐろのさしみをかつてもらひ、そばのぶつかへ入れて三ツたべたら、そのばんわかだんながつむりをかゆがり、わたしもひとばんねぬ事があつた。ほんの子なら、どくとしてつくひもせまいと、そのときもこうくわいしました。さにとやつておいた子にしなければなら、わかだんなががやくなり、たいせつにしたゆゑ、今も此やうにおせはになるのじや。おきよさまの今のおはなしをとりのおんばどのにきかせたいのう。おかつどん。「ちげへねへ。きのふもかしの日あたりであの子はかしへおッはなし、くらだしするわかいしゆとくるふてゐたがよくけかもさせぬものだ、とおきよがうばのはなしに、よそのあしきをもしるは、あくをこらすのはしなりけり。

第二段 月日のたつた矢のごとくにして、おきよ廿五にて○松竹やへよめにきたり、梅吉をまうけしより廿一年ゆめのごとくたつうちに、しゅうとのふたりもはて、をつとにもわかれ、せがれうめ吉○かとかして梅右衛門となのり、よめもありてふうふなかむつましく、ひとりの母に孝行をつくしけり。

その二人のぜんをほめるはすくなく、人のあくをそしるはおほし。されば松竹やのおふくろは、をつとにわかれてかみをもつめべきに、さもなきは日ごろの口にはにあはぬ事なりといへば、つぎへ



二代目梅右衛門
おすみ

二代目
松竹や
梅右衛門

▲又ひとりがいふやう、としはまだ四十五なり。きりやうがよいゆゑ、三十ぐら
 るに見ゆる女。かみがをしいはづなりと、口くそしりけるが、此おきよがかみ
 をつめぬには心ありての事なり。そのわけは次をよみてしるべし。○さてある日、
 おきよが十二のとしより廿五までつとめたるあふぎがやつのおやしきより、女中を
 あづかるすくなむねのしんとて六十あまりのろうじんかこにてきたり、手ふだを
 見せへいだし、おきよどのにといひければ、おきよこれをきゝてかけものかけてあ
 るざしきへとほし、なにかのあいさつをはりければ、むねのしんひさをすゝめ、
 「こん日おたづね申たるはへつきにあらす。おてまへもしつてのとほり、此たび、
 なでしこひさま、花ぞのさまへのおこし入れ、おともすべきつぼねはおてまへも
 しらるゝ女。ゆゑありてにはかのおいとま。あとやくをつとむべきものゝ心あても
 なく、せつしやなどもたうわくせしに、さく日、だんなさまおほせに、きよ事今は
 るんきよいいたしてをよし、たいきながらさいきんいたし、ひめがつぼねをつとめ
 くれるやう、わらはふうふかたのむと申きかせ、そちもともぐきよをすゝめ、○
 ③さいきんをはからふべし。こし入れさせてのち、ふうふなかのよきもわるきもよ
 めのそばにつきそふつぼねのさしひきにある事なり。きよはその事もこゝろえてを
 るゆゑ、きよをつけてやればあんしんする。これらの事も申きかせ、ぜひともし
 きんをいたすやう、そちからまたのめとのおほせゆゑ、とりあへずするさんいたし
 たときゝて、おきよはさしうつむきなみだをひざへおとしけり。

「八表



すくなむねの
しん

母おきよ

③さいきんをはからふべし。こし入れさせてのち、ふうふなかのよきもわるきもよ
 めのそばにつきそふつぼねのさしひきにある事なり。きよはその事もこゝろえてを
 るゆゑ、きよをつけてやればあんしんする。これらの事も申きかせ、ぜひともし
 きんをいたすやう、そちからまたのめとのおほせゆゑ、とりあへずするさんいたし
 たときゝて、おきよはさしうつむきなみだをひざへおとしけり。



下女

○さておきよなみだをぬぐひ、「かずならぬわたくしをさほどにおぼしめしてくださる事ありがたくて、おもはすふくをつみました。すぐさまおうけをも申上べきはづなれど、おいては子にしたがふと申す女のをしえもござりますれば、せがれへも申きかせ、みやうてうせがれをもつてあなたのおたくまでおへんじを申あぐべし。「いかさまごしそくへもあさいおはなしあつて、ともかくもさいきんあるやう、おへんじをまち申す。ほかにつとむるおししもござると、だしたさかつきも入れさせてかへりけり。」

第三段

かくておきよはせがれ梅右衛門ふうふものかけにてたちぎするをちらりとみたるゆゑ、つねのゐまへかへり、ふうふをまねきて申けるは、「今むねのしんどのゝはなしきいたである。あのとほり御しゅじんさまよりあつきおぼしめしのおたのみと申し、きさんはかねてのねがひゆゑ、さいきんいたすころじやが、こなたはなんとおもやるそ。梅右衛門小くびをかたむけしはありて、「おぼしめしをくじくやうなれど、子の身としては、あなたのおとしでいまから御ほうこうなさるは、よい事とはぞんじませぬ。「そりやまたなせに。「さればござります。今御らんきよの御身にこれかららくをなさるべきに、御ほう公させ申ては、あれ見よ、うめ右衛門はとしたけた母をうるさくおもひほう公さす不孝もの、と人にゆびさゝるゝもざんねんでござります。此事ばかりはお心にそむきます。だうぞおやめなされてくださりませ、といふそのことばのをについて、梅系もんがつまおすみ「わたくしもまたしうとめがいふたをよきさいはひとおもひ、おひだしたのであるとせけん（世間）のそしりもくちをし、ならふ事ならおことはりなされませ、とふうふがことばをきゝてうちなづき、○「子としておやにつかふはさこそあるべき事なれ。さりながら、おのしたちは奉公していとまをとればしゅしんでないとおもやうが、ひとときのいやしき奉公はかくべつ。わしは十二のと□□ら廿五まで御おんをたんといたゞいただんなさまなれば、わし一代は御しゅじんさまなり。」

むすめ

こけ

つぎへ



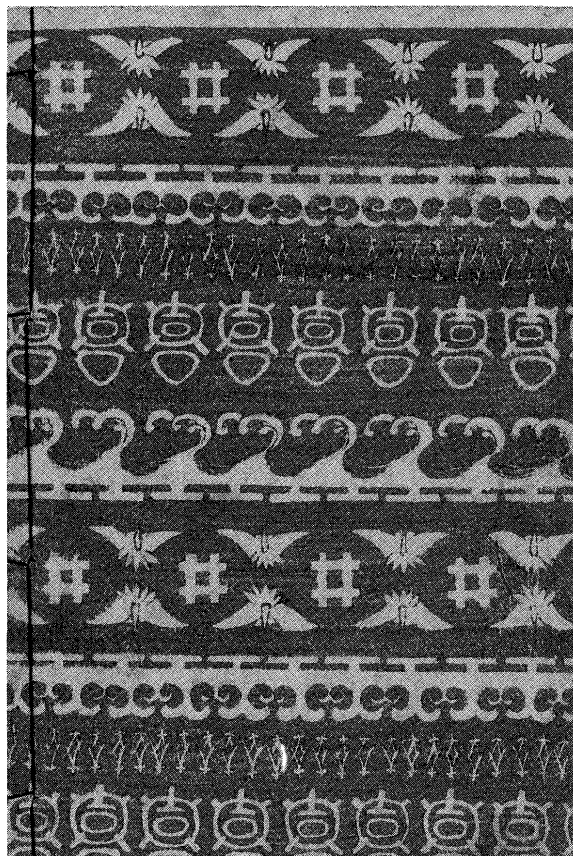
しうとめ

よめ

▲その御しゆじんさまよりお目がねにあづかり、きさんせよとめさるゝはありが
たき事なり。しかるをうそいつはりを申てまゐらざるは不忠なり。さて又さいきん
するが、かねてのねがひといふわけは、いかにふそくがなければとて四十五で
ゐんきよするはまだはやし。さればとてかつてのせははおすみにゆつり、みせには
やどもちのばんたうもあり、かげふの事はおのしがせいをいだすゆゑ、わしが口を
いだすにおよばず。わしはまことにらくゐんきよ。四十五でらくするは天たうさま
へもつたないし。しかのみならず四十代でこけたつればいたくないはらをさぐるゝ
もくちをし、つれあひにわかれし時、かみをおろさんとおもひしが、われゝし
きの身ではかみさへつめぬげさまもあるなかに、われはがほするかとおもはるゝ
もいやなり。又古歌に「かんきんのまへはほとけにむかへども、うしろにしゆらを
もやすかやり火」とよみしは、ほとけいぢりしながらよめをいびるをいましめたる
歌なり。かれこれをおもへばいつその事、いぜんのおやしきへさいきんをねがはん
とおもふゆゑかみもおろさず。髪をおろさぬとて心はこゝろなり。それを◎とし
る人もあるはわしがこゝろをしらぬゆゑなり。さてまたあさにつれるよもきといふ
ことわざあり。あさはすぐなるもの、よもぎはくねるもの也。④されどあさのな
かにあれば、それにつれてすぐにおひたつなり。人もそのごとくなれば、つぼねの
身もちをしもにたつものが見ならふものゆゑ、つぼねのやくははなはだむづかしき
ものなり。わしがつとめたみさをのまへさまはけんぢよにてましますゆゑ、あさと
よもぎのことわざにつけて、いろゝの心えををしえ玉ひし

次へ

「十表



(裏表紙の刷色は茶色)

けうくん
教訓
めのとのさうし
乳母草紙
佐野屋寿梓
初編
上下

心織
筆耕

「初編下表紙

「初編上裏表紙



けうくんのとのさうしよへんがふくわんげさつ
 教訓乳母草紙初編合巻下冊

第四段 (業) はたをおり、きるものをぬふ事は、神代より女の手わざなる事、日本紀、
(業) 古事記にも見えたり。その事くはしからざりしゆゑ、応神天皇の御時、(唐土) もろこしの
(業) 呉の国よりはたおり、ものぬふ事にすぐれたる四人の女をめして、そのわざをし
(業) えしめ玉へり。されば、今の世までもおりものを呉服物といふなり。(註) さて又ぬ
(模) もやうのはじまりは、聖武天皇の御時、(唐) 吉備大臣入唐してそのわざをならひ玉ひ、
(唐) からの女の此事はすぐれたるをもめしつれて帰朝し玉ひ、大内の女房(唐) ばうたちに
(晋) ならはせ玉ひしより、もやうをぬふ事国々へもひろまりしとかや。これみな女の手
 わざよりはじまりたるものなれば **次へ**

めの
 との
 さうし

初編下

京山作
 国芳画

京水筆
 『百鶴』

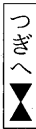
〔天保十五年春〕 佐野屋寿梓

「表紙見返し」



▲糸はたはいまも女のすべき第一の事なり。むかしは大内には、おりどの、
 ぬひどの、そめどのとて宮女たちがうへへがたのめしものは、おりもし、そめも
 し、ぬふ事はもとより也。人のよくしりたるむらさきしきぶ、清少納言なども、き
 るものをみづからぬひたる事、此女ぼうたちがかきのこして、いまにつたはる
 さうし、ものがたりにもあきらかに見えたり。これ、今より七百年ばかりのむかし
 の事なり。これよりのち五百年のころも、大内の女房たちがかりぎぬ、すはうなど
 ぬふ事、あぶつにがめのとのさうしといふものにも見えたり。むかしは右のごとく
 雲のうへ人さへものぬひをしたるに、いまはひかるものさへたくさんあれば、いや
 しき町人の女ぼうも、ものぬひの下女をかへて、わがをつとのきるものもこれに
 ぬはすはいかにぞや。よしある人はかくべつ。いやしき身としては、女のみちには
 づれたる事ならずや。女はものぬふ事とふみかく事さへすぐれたれば、よめ入りす
 るにはたくさんなれど、よき御ほう公するには糸竹のわざ、まひの手ぶりなどもよ
 くせざればめしつかひ玉はざるゆゑ、せんかたなくいとほりをとらすべき女の子に、
 ざうけのばちをとらすなり。これはんくわの地のならひなればいかんともしがたし、
 とあるおきながいへり。○

◎第五段 それはさておき、松竹やの母おきよ、あふぎがやつのかなめさまへ
 きさんして、名を清川とたまはりて、みさをのまへのもち玉ひたるなでしこひめの
 つばねをつとめ、はなそのさまへの御こんれいもめでたくすみけり。○此清川は糸
 竹のわざはさら也。香、茶、いけ花、歌のみち、ものよむ事も四書五きやうの
 そどくなど女中にをしえ、なぎなたもなでしこひめへ





なでしこひめ

▲御しな申すほどなり。これみな十二のとしからめしつかはれたるなでしこひめの母ぎみ賢女（けいめい）にたましますゆゑ、かゝるげいをもおそばにてならひおぼえたるなり。さればこそ、此たびもさいきん（さいきん）を御たのみありて、あまたの女中の上におきたまへり。されどげいにもほこらず、けんゐるもふるはず、ばんじものやはらかにて、しかるべき事あるときはりをたゞしてをしえさとし、忠義をさきとしておのれをのちにするゆゑ、よくをかはきて手まへがつてをした事なく、えこひいきをせず、人をつかふにおもひやりありてあはれみふかく、しもへほどこすことみづのながるゝごとくなれば、水くむおやちまで、おつばねさまの事といへば、くひかけた（くひ）めしわんをもしたにおきけり。されば、なでしこひめのよめ入りしたまひたるはなそのさまにゐつきたるつばねはさらなり。女中たちもきよ川をあしくおもふものなく、しんじつにむつまじかりければ、御ふうふのなかもおのづから御むつまじかりけり。これみなひめぎみをほさするきよ川が忠義のこゝろ一ツよりいでし事なり。

第六段 さるほどに、御ふうふの御なかむつまじければ、天地しぜん（自然）の和合（わがふ）にかなふゆゑ、ほどなくおひのおんいはひありければ、上下のよろこびはいふもさらなり。はなぞのどのゝおほせとして つぎへ

十三表



つばねきよ川

▲きよ川は子もうみたるものなれば、ばんじきよ川にまかせよとありければ、おんまちうけのおちの人をかへ玉ふにも、まづその女がすじやうをたゞし、その子をもめしてたいどくのありやなしやをもあらため、さてまたなでしこひめへをしえ申けるは、女はおびのいはひありてよりのちは、身をはたらかすがくすりなり。はたらかしさへすればさんはかるきものなりとて、おざしきへ石をちらして女中たちまじりにひろはせ申シ、あるひはちやのゆのかずだてをして、はこび手まへにおん身をはたらかせ申ければ、あたる月にやすくと御さんありてしかも玉のやうなる男ぎみにておはし申しければ、お馬やの豆介までころくしてよろこびけり。

○そもく女は子をうむべきはづのものなるゆゑに、天より子をやしなふちぶさまでこしらへくださるに、子のできざるはくだものにむだ花のあるやうなものにて、せいきのたらざるゆゑなり。①そのせいきをやしなふ妙やくあり。江戸京ばし銀座一丁目京でんみせにて、くわいにん丹ねりやく一さい五匁。半さい二匁五分。女はらみくすり男には大じんやくなり。女は五十以上たりとも月やく見玉ふうちはくわいにんする事妙なり。そのわけくはしくのうがきにしるしあり。男はかしらに霜をいたゞくとも、せいきわかき人におとらず。きけつをます仙やくなり。その妙は用ひて知るべし。○十三味薬、あらひこ。水晶粉、一包百廿二せん。第一いろを白くし、いかほどのあれしやうにてもかんばせを玉のごとくにする事妙なり。にきび、そばかす、ひゞ、しもやけ、やけど、きりきず、

つぎへ▲



下女おたつ

▲いづれも用ひやう、のうがきにくはし。○薬おしろい白牡丹、百十四せん。
うすげしやうのおしろいなり。○極上々吉おしろい雲の上、五十九せん。○えりお
しろい、あくぬき、ぱつちり、五十一せん。半えりへつかず、あせにながれず。右
いづれもこのたびねだん引下けたる代せんなり。

本もん 第七段 きよ川、ある時風のこゝちにて引こみけるに、あるところより見

まひとしくわしをりをもらひけるに、そのまゝいしやのかたへおくりけり。その
よ下女のおたつ、きよ川がかたをもみながら申けるは、「あなたさまはものをおも
らひあそばすと、のけておきあそばすことがないゆゑ、おさとさまからおつかひの
きたときなどは、おうつりがないゆゑ、ま事にこまります。わろくならぬものなど
はすこしはのけておきあそばしませ。きよ川うちうなづき、「いかさまうつりに

こまるはもつともじや。こんどからのけておきませう。しかし、しまひすぎて
あるへいをとろかし、うめが、でんぶにかびがついては、人にもつかはしがたくて
もつたなし。けふのくわしをりも◎このごろさちあんのせわになるゆゑ、

なんぞとゝのへてもやりたくおもひしゆゑ、つかはしたのじや。すべてものには
けんやくとりんしよくとがある。けんやくといふもじは、けんもやくもつゞまやか
とよむもじじや。又りんしよくとはりんはをしむとよみ、しよくはむさぼるとよむ
もじじや。けんやくとはもの事をつゞまやかにして、なりたけもの入りをはぶき、
おごらざるがけんやく也。次へ

「十五表



四編初

▲此けんやくするをしい人といふはひがことなり。又あるがうへにもむさぼり
をしむをけんやくとこゝろうるもあやまりなり。このけんやくとりんしよくとのさ
かひをよくわきまへよ。つゞまやかにしておごらざるけんやくは、いへはんじやう
のもとひ。むさぼりをしむりんしよくは人にうらみをむすぶのいとぐちなりと、も
のにかいてある。おたつようおぼえてゐやれ、「はいく」ありがたうござります。

その二 かくてきよ川、なでしこのまへにみやづかへすること十七年のあひだ、
ちう義をこゝろにわすれず。よくをすてゝおのれがかつてをなさず。上をうやまひ、
下をいたはり、もの事にけんやくして身をおごらざりしゆゑ、人みなそのとくにふ
くしけり。○さて、またなでしこのまへは、御よめ入りのあくるとし、男ぎみをま
うけ玉ひしより、つゞいて男女の御ふたりをもうみ玉ひ、三人のきみたちすこやか
にせいじんし玉ひ、はじめの男ぎみははなぞのこてふの介どのとて、ことし十六に
てめでたく御げんぶくありけり。その日のめでたさはいふもさらなり。きよ川へも
しなくたまものありて、ありがたきおことばをもたまはりければ、うぶごゑをきゝ
たる次へ▲



花ぞのこてふ
の介



つばねきよ川

▲わかさまの御げんぶくのうつくしきを見て、うれしくておもはずひさへひとしづく、そでにふくをぞつみにける。

第八段 そのよ、きよ川へやにありてつらくおもふやう、われおやたちの御おん

をうけてけいをおほえたるゆゑ、十二のとしより、よき御ほう公をつとめ、みさを

のまへさまけんぢよにてあらせられしゆゑ、そのおそばにありてものよむ事、歌の

みち、なぎなたまでも、おぼえしは、町人のはらにうまれたれど、ありがたき御み

やづかへをしたるゆゑなり。これみなちゝはゝとだんなさまとの御おんなり。その

御おんをかへさんとて、せがれやよめの孝しんにそむき、四十五のとしさいきんし

たも、だんなさまの御おんをかへさんためなり。わがとしもことは六十二なり。

十七年の御ほう公にきずのつかざるうち、こうなり名とげて身しりぞくは天のみち

なり。しかのみならずをつとにわかれたるとき、かみをおろさんとおもひしも、だ

んなさまへ御おんをかへさんためにすがたもかえず、みやづかへの身なれば、おや

をつとはかまゐりもころにまかせず、これも本いにそむきたる事也。なにかに

つけても御げんぶくを花にして、いんきよのおいとまをねがふべしとこゝろにをさ

めてふしどに入りけり。

第九段 それはさておき、きよ川がうみたるせがれ梅太郎、ちゝの名をつぎて梅ゑ

もんと名のりていへをつぎしに、きよ川がそだてたる子なれば、よくものゝ義理を

わきまへて身もちたゞしく、母に孝しんふかく、つまのおすみもをつとにつれて心

だてよき女なりけり。



○さてある日、きよ川かたよりつかひきたりたる。そのふみに、このほどさうだんしたるごとく、おいとまのねがひをいだしたるころ、いかやうにもほやうして、つとめはかつてにして、いま一両ねんつとめよとのおほせなりとのふみなり。くはしくはこれよりとへんじをやり、ふみををつとに見せて申けるは、わたくし、^{（師走）}しはすこゝへよめ入りしたる、そのあくるとしのはる、お母さまいきんなされたれば、お母さまのおそばにゐたはわづかふた月ばかりなり。しうとめにつかへざるはよめのみちにあらざれども、おすきでなざる御ほう公せんかたなし。しかるに、このたびおいとまのねがひ。やれうれしや十七年をいちどにおいたはり申さんとおもふにかひなきこのおふみ、あなたはなんとおぼしめす。梅ゑもんうちうなづき、

せがれ梅太郎
つまおすみ



松竹や梅ゑもん
つまおすみ
○さてある日、きよ川かたよりつかひきたりたる。そのふみに、このほどさうだんしたるごとく、おいとまのねがひをいだしたるころ、いかやうにもほやうして、つとめはかつてにして、いま一両ねんつとめよとのおほせなりとのふみなり。くはしくはこれよりとへんじをやり、ふみををつとに見せて申けるは、わたくし、^{（師走）}しはすこゝへよめ入りしたる、そのあくるとしのはる、お母さまいきんなされたれば、お母さまのおそばにゐたはわづかふた月ばかりなり。しうとめにつかへざるはよめのみちにあらざれども、おすきでなざる御ほう公せんかたなし。しかるに、このたびおいとまのねがひ。やれうれしや十七年をいちどにおいたはり申さんとおもふにかひなきこのおふみ、あなたはなんとおぼしめす。梅ゑもんうちうなづき、

松竹や梅ゑもん
つまおすみ

○さてある日、きよ川かたよりつかひきたりたる。そのふみに、このほどさうだんしたるごとく、おいとまのねがひをいだしたるころ、いかやうにもほやうして、つとめはかつてにして、いま一両ねんつとめよとのおほせなりとのふみなり。くはしくはこれよりとへんじをやり、ふみををつとに見せて申けるは、わたくし、^{（師走）}しはすこゝへよめ入りしたる、そのあくるとしのはる、お母さまいきんなされたれば、お母さまのおそばにゐたはわづかふた月ばかりなり。しうとめにつかへざるはよめのみちにあらざれども、おすきでなざる御ほう公せんかたなし。しかるに、このたびおいとまのねがひ。やれうれしや十七年をいちどにおいたはり申さんとおもふにかひなきこのおふみ、あなたはなんとおぼしめす。梅ゑもんうちうなづき、

○さてある日、きよ川かたよりつかひきたりたる。そのふみに、このほどさうだんしたるごとく、おいとまのねがひをいだしたるころ、いかやうにもほやうして、つとめはかつてにして、いま一両ねんつとめよとのおほせなりとのふみなり。くはしくはこれよりとへんじをやり、ふみををつとに見せて申けるは、わたくし、^{（師走）}しはすこゝへよめ入りしたる、そのあくるとしのはる、お母さまいきんなされたれば、お母さまのおそばにゐたはわづかふた月ばかりなり。しうとめにつかへざるはよめのみちにあらざれども、おすきでなざる御ほう公せんかたなし。しかるに、このたびおいとまのねがひ。やれうれしや十七年をいちどにおいたはり申さんとおもふにかひなきこのおふみ、あなたはなんとおぼしめす。梅ゑもんうちうなづき、



なでしこのまへ

▲きたためたる小そであまたとりいだして、女中たちへわかちあたへていひけるは、おいとま玉はりしうへは、かみをおろさんとはかねてのねがひなり。つむりまろめればいろの小そではいらぬものなり。それをしまひおくはぼんなうのたねなり。みなさんもらふてくだされと、それくにつかはし、身からしてえらみたるなぎなたも、町人のいんきよにはいらぬものとて、あとやくのつばねにゆづりければ、ころもきよきよ川どのと人くよろこびかんじけり。

第十段 かくてきよ川はめでたくやどへさがりたる○そのあくる日、かみをおろして名を妙清せいとあらため、おや、をつとのはかまゐりをなしけり。これを見て

はじめかみをおろさぬをそしりたる人くもかんじけり。○さて梅ゑもんがすみかはてまへの地めんなれば、ころのまゝに母のいんきよよしよをしつらひてうつらせたる。そのよ妙清金子百両いだし、梅ゑもんに申しけるは、これは御ほう公のうちすこしづゝのけおきたる金子なり。此たびふしんの入用にとて梅ゑもんにつかはしければ、うめゑもんおしもどし、おや、しなふは子のあたりまへなり。此のちも御ふじうあらぬやうにとおもへば、此金子はお手もとにさしおかれ、あなたのやりたいとおぼしめすもの□□こし玉へといひければ、めう清うちうなづき、此地めんの内にもほそきくらしをする人十けんばかりあり。その内にはあるじひとりのかせぎにて子ども三、四人やしなふもあり。見るもいたはしきさま也。此金子をあの人くへほどこしたくおもふなり。いかゞあらん。「それはよきおぼしめしなり。

つばね
きよ川

次へ

十九表



きよ川ていは
つして妙清

下女
おたつ

▲それにはしやうあり。わたくしへおまかせなされませとて、ちのみ子まであた
まかずに入れて一人まへ金三百疋づゝみづ引をかけ、いんきよがみなさんへおちか
づきのためあげるものあり。いんきよかたへきたり玉へとしらせければ、かゝアタ
ちこれをきゝ、たいさうによびつけてろくなものくれませまい。しかし地ぬしの事
じやゆかざなるまいと二、三人さそひてきたりければ、妙せい、よくこそまゐられ
たれ、これからはおせわになる事もあらん。これはお一人まへに一ツづゝ梅ゑもん
がかきつけたる人かずにあはせてつかはしければ、かゝアたちあんにさうゐしてよ
ろこびたちかへり、づるけてこぬものにしらせければ、せんたくしかけたかゝもね
かしておいした子をいだき、風でねてゐたおやちもどやゝときたり、もくろくもら
ひてよろこびけり。○さてこの地めんをあづけておくものゝかないへもそれゝに
もくろくつかはしければ、かげにても妙清にさまをつけざるものはなかりけり。さ
て又めう清が下女おたつが母をよびて申けるは、たつ事七年このかたていじつにつ
きそひたる事きどくなり。○◎これはたつがたつき金にとらすとて金二十両あた
へければ、馬さへもたぬ百しやうなれば、これはゆめかとよろこびけり。○かゝる
ほどこしをなしけれども、百両のかね三十一両のこりけるを梅ゑもんが女房おすみ
にゆづりけり。

第十段 かくてめうせい、おたつをとにつれ、あげものみやげのしなくゝをもた

せ、花ぞのさまへお札に上り、二、三日とうりうしてかへりければ、梅ゑもんは母
がいんきよのいはひとで、しんるゑをいんきよよへあつめてなしけれ。ば、その
なかにて上になつとしよりめうせいにむかひ、およそわれゝしきがいやしき心の
くせとして、としがよればよくのふかくなるものなり。女はなほさらの事にて、し
んでたにんのものと。もしらず。あるがうへにもほしきがおほかたのならひな
るに、このほどのほどこしいづれもかんしんいたしました。なかゝできぬ事とほ
めければ、めう清にことわらひしばかり。ほかにことばはなかりけり。

録目板新西己年二永嘉

| | | | |
|-----------|------------------|-----------------|-----------------|
| 鎮火五龍圖 聚 井 | 教訓乳母草紙 七編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 |
| 鎮火五龍圖 聚 井 | 教訓乳母草紙 七編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 |
| 鎮火五龍圖 聚 井 | 教訓乳母草紙 七編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 |
| 鎮火五龍圖 聚 井 | 教訓乳母草紙 七編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 |

教訓乳母草紙初編終

孫名京山作 孫名國芳画

録目板新西己年二永嘉

| | | | |
|-----------|------------------|-----------------|-----------------|
| 鎮火五龍圖 聚 井 | 教訓乳母草紙 七編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 |
| 鎮火五龍圖 聚 井 | 教訓乳母草紙 七編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 |
| 鎮火五龍圖 聚 井 | 教訓乳母草紙 七編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 |
| 鎮火五龍圖 聚 井 | 教訓乳母草紙 七編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 | 繪圖見西行 十編 一陽齋豊國画 |

妙清 下女 おたつ 孫むすめ

教訓乳母草紙初編終

孫名京山作 孫名國芳画

妙清がにことわらひてもいはいざりしは、やみのうめがなるべし。○さてしんるいのふるまひもすみければ、これまでつかひたるおたつにながのいとまを申つけければ、おたつはいつまでもおそばにをりたしといふ。めうせいふやう、つかひなれたるそちがをらねばわしはめいくなれど、此ほど金子のれいにとがが見えたるをみれば、いかうとしがよいたり。○やどへさがりて孝かうをつくすべし。これ子たるものゝみちなり。ほう公にとしのたけるがふびんゆゑいとまをやるのじや。その内よいところがあらばかたつくべし。くれぐれも二おやにつかふる事ほう公するとおもへとをしへければ、なみだをぬぐひてありがたがりけり。○さて、これより妙清孫をあつめて、そちたちもやがて子をもつ身なりとて、子をそだてる事のよしあし、おやをつとにつかふ心えや□□□□いましめ、よめをいびる心えちがひなど、まごにをしえる事二へんにしるせり。めでたし□□□□。

裏表紙見返し

二十裏





(裏表紙の刷色は茶色)

初編 註

- 註1 阿仏尼が宮中に仕出していた紀内侍あてに書いたとされる書簡体の女子教養書。『乳母の文』
とも言う。
- 註2 正徹著の歌論書。通称『正徹物語』。正徹は東福寺の書記であったことから徹書記といわれ
た。一四四八—一四五〇頃の成立。
- 註3 『後漢書』列伝七 列女伝七十四「姜詩妻伝」。
- 註4 本文に『近世孝婦伝』とあるが、この本については不明。ただし、この項の原点は、『近世
畸人伝』の「大和伊麻子」の項と思われる。
- 註5 江戸中期の京都の書家。一六三一(寛永九)—一七〇三(元禄一六)。もと林氏、名は観、通
称八郎右衛門。溪翁・大虚庵・玉蘭堂などの別号がある。行草で一家を成し芭蕉の師となる。
- 註6 『荀子』の「勸学」に「蓬生麻中 不中而直」とある。
- 註7 『日本書紀』巻第十、応神天皇三十七年の項。及び、『古事記』国主の歌・百済の朝貢の項、
『日本書紀』巻第十四、雄略天皇一四年正月及び三月の項にも同様の記述がある。
- 註8 風邪のこと。
- 註9 梅の花は闇でも香るので黙っていてもわかってしまうということ。『古今集』に「春の夜の
闇はあやなし梅のはな色こそ見えね香やはかくる」とある。
- 註10 嘉永二年の干支は己酉である。己はしばしば巳と誤記されることがあるが、己とも巳とも判
断の出来ない文字が使われている。翻刻にあたり、ここでは己と表記した。同じ版木が第二
編下裏表紙見返し、第三編下裏表紙見返し、第六編下裏表紙見返しに使われている。
- 註11 初編下裏表紙見返しの翻刻を下に掲げた。(市立米沢図書館所蔵本による。)

初編下 裏表紙見返し(註11)

| 録目惣板新年辰甲五十保天 | | | |
|---|--|------------------------|-------------------------------------|
|  のぼせ症の妙薬 五龍円 取次 曲物入二百文より差上候 | 森羅 万象 多異事雑談 四冊 <small>森羅 万象 多異事雑談 四冊 貞重画</small> 此さうしはきんしうちう魚さうもくのるい おのくわがぶんげんをかたり栄枯せいすいの咄也 | 同 二編 四冊 同 画 同 作 | 教訓姥草紙 初編 四冊 山東京山作 歌川国芳画 |
| | | | 初前太平記 楽亭西馬訳 編記 遠霞平安城 四冊 歌川国芳画 |
|  錦絵団扇画半切千代紙の類数品 東都芝神明前三嶋町角 佐野屋喜兵衛梓行 | 同 三編 念力弓勢 四冊 同 断 同 画 | 同 二編 驢猿嶋内裏 四冊 同 同 画 | 同 断 同 画 |

「初編下裏表紙



新板

〔丸黒印〕
『巴山人』

京山作

国貞改
豊国画

めのとのおひなし
乳母草

しあとおひなし
子跡追話

佐野屋寿梓

〔二編袋〕

〔丸黒印〕
『普』

国貞改
代豊国画

〔二編上表紙〕



めものさうしあとおひはなし
乳母草紙跡追話

妙清

今はむかし、かまくらにて富家にくらすふくとく屋万右衛門が母妙清、せがれか地
めんの内へいんきよなし、まいはん孫どもをあつめ、ものなどたべさせよるこふを
見たたのしみとし、又は子どものころへともなるべき、むかしはなしをしてきか
す事つねなり。○此妙せいといへるは、十二のとしよりはたちのうへまでさる御方
に御奉公をつとめ、しゆひよくおいとま玉はり、ふくとくやへよめ入りして男の子
をまうけ、此子せいじんしてをつとにわかれ、四十代にてこけとなりしに、いぜん
つとめたる北のかたのおたのみにてふたゝびおつぽねをつとめ、六十をこえていん
きよをねがひ、めでたく御いとま玉はり、今ていはつらくいんきよしたるまで、
忠義貞節のものがたりは、此ゑさうしのぜんへんをよみて、この妙せいが貞操節義
なみくの女にあらざるをしらせ玉へ。○さて、秋のよながのつれづれに、れいの
孫ともきたり。「おばアさん、なんぞおもしろいはなしなされませ。」いや、まつ。
はなしもたくさんしたゆゑに○たねがつかしました。「それでもなんぞおはなしな
され。」そんなら、おもしろくはないが、一ツはなしませう、と譚海といふ写本の
六のまきに見えたる事をたねとし、妙清がおもひつきを増補して孫へはなしたるも
のかたり左の如し。○

④ 第一回 今はむかし、さがみの国のかた山ざとに、太郎介といふ百しやうあり
けり。まづしきくらしのなかにて、おやながくわづらひてはて、母もつゞいて心
あしく、太郎介、女房おなべをあひてにせはしかせぐなかにも、母に孝をつくし
けるに、

次へ



一ぜんめし
どんぶりめし

めしや甚六



御一人前
めし
十二もん

太郎介

▲ふたおやのわづらひにさまぐの物入りありて、おやのゆづりのでんちを
しちいれしたるを、母おや、あき夕心にかゝるとくやみけるゆゑ、いかにもして
うけもどし、母の心をやすめんと、太郎介のうぎやうのひまあれは人にやとはれな
どしてかせぎけれども、百、二百のせにをためて十兩あまりのしちをうけもどさん
とするは、ありがたふをくむかことし。●さて、母もやうく①②ぜんくわいしけ
れば、太郎介はさら也。おなへもよろこひけり。③④かくて此村にてくらの二ツも
ある人より太郎介をよびにきたり、金子七両もたせて、かまくらへひきやくにやり
けり。これ太郎介が日ごろ正ちきなるゆゑなりけり。

「三表



母

第二回 太郎介は十二の時て、おやにつれられ、はじめてかまくらを見たるをりは、

太郎介

ものゝ心をもわきまへざりしが、ことし三十三さい。廿二ねんぶりにてかまくらにきたり、そのはんじやうを見て、〇〇きもをつぶし、あはれかゝる所にうまれなば、なに事をなしても母をやすくやしなはんとなるきなからおもひつゝ、はらもへりたれば一ぜんめしやへは入りしに、ていしゆとおぼしく帳ばよりたちいで、「太郎介どのじやないか。」「おまへはだれであつたな。」「わすれたか、となり村の〇〇甚六じや。」「いかさまさうじや。やれく久しぶりじや、とおてらさまでおなじやうに手ならひしたるなかなれば、一ぜん十二ものめしくふつもりなりしに、おもはずちそうになり、はなしをきけば、廿三のとし、かまくらへいで、ほう公なし、しんぱうしてかせぎ、まづ此くらゐまでにはしあげたとはなしをきゝ、心をつけて見れば、みせのかたわきに米五ひやう、しやうゆも三たるあり。みせは男三人下女もつかひ、女房も

次へ

四表

つまおなべ



甚六つま

▲い、あいさつなすことばのまはし、ゐなかとちがふたものなり。太郎介はひきやくの事をかたりていとまごひをなし、こゝを立いでみちくつくくおもふやう、じん六もわれとおなじやうなる百しやうのおとゝなり。甚六いかほどかせぐともゐなかなではあゝのくらしはならず。さてもうらやましき身にはなりけるぞと一せぬめしやをうらやむは、太郎介がひんくなるゆゑなりけり。

第三回

かくて太郎介ひきやくの用はてゝわがやへ立かへり、母がつねぐほしがりたる、しろきびいどろのじゆずをみやげにとて、かまくらよりとゝのへきたりしは、これ孝しんのなすところ也。○さて廿二年ぶりにてかまくらを見たるはなしをなし、じん六にあひたる事をもかたりて、女房おなべにいひけるは、「わしもじん六のやうにあにでもあらば、かまくらにてかせぎ、おやぢどのゝゆづられたでんぢをうけもどし、母びとの心をもやすめたけれど、おやひとり子ひとりなればせんかたなし、とためいきをつきければ、つまのおなべ「おまへそれほどにおもはしやるなら母さんはわしがあづかります。二、三年かまくらでかせいで見さんせといひければ、母これをきゝ、「わしがやまひもさつはりなほりたれば、おなべをあひてにちんしごとしても、ふたりの口はぬらすぞや。なにもあんじる事はない。おなべさへとくしんなら、かまくらかせぎしてみやれ、と母も女房もすゝめければ、さらばはるになりてかまくらへゆくべしとさうだんをきはめたるは十一月のすゑなりけり。

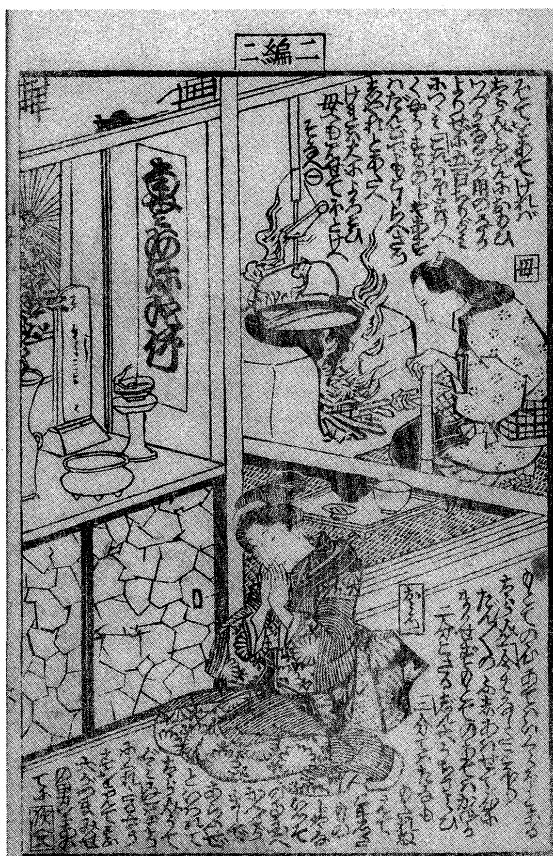
太郎介

その二 かくて太ろ介あくるとし三月のはじめ、かまくらへと○心ざして立いでしが、あたりとなりはさらなり。だんな寺へもいたり、てゝおやのはかへもいとま

甚六

ごひなどし、上人へも母の事をたのみ、かれこれ時をうつしければ、その日は七里きて日くれになりければ、おち川といふしゆくはづれの木ちんやどへとまりけるに、五十あまりの母、十六、七のむすめ、おや子のくらし也。此むすめかほもよく、なにかにつけて母をいたはるやうすをみて、孝しんなる太郎介かんしんしけるに、此日みちよりあめにふられたれば、太郎介きやはんをどろになしたれば、えんの下へ入れおきを、此むすめとりいだし、あらひあげてほしておくなど、木ちんやどにてはせぬ事なるに、さりともしんせつなる心と、これにかんしんしけり。●さて此むすめなにかをしまひ、ぶつだんにむかひしはらくおがみけるゆゑ、心をつけてみれば、あたらしきかみにかきたるかいみやうあり。母がおみつゝとよぶに、

次へ



南無阿弥陀仏

二編二

おみつ

母

とはうにくれたるやうすを見て、甚六がつまみせの男をあいてに、
次

「六表

太郎介

▲名もしられければ、太郎介「これおみつどの、見ればあたらしきるはいあり。
そもしのためにはなに人ぞ。おみつ「はい。わたしがとゝさんでござります。こん
やは百日のたいやなれど、いひさして、かほにそてをあてければ、太郎介ふびんに
おもひ、わづかなるる用のなかよりせに五百ちりがみにつゝみ、「これはほとけへ
くやうするのじや。あすはだんごでもこしらへさつしやれとあたへければ、大によ
ろこひ、母へも見せてほとけへそなへ、○おや子かずく礼をのべ国所をたつね
たれどいはす、太郎介といふ名はかりきかせけり。○おみつ、此とき太郎介か五百
のぜにおんをわすれす、三年たちてのち太郎介にめぐりあひ、さいなんをたすけ
る事、下のまきにくはしくしるす。

第四回

それはさておき、こゝに又めしやのじん六けふの日もくれかたゆゑ、かひ
鳥のちやばをかこに入れんとおひまはしてゐたるをりしも、「甚六どのおやどでう
れしやといふは太郎介也。「ヤア又ひきやくにござつたか。「いやくこなたにたの
みがあるゆゑわさくきましたときゝて、かつてへともなひ、めしなとくはせ、か
れこれしてみせもしまひ、やうすをたづねければ、しかくのよししくはしくきゝ
て、甚六「その心なら、まづたなをかり、なんぞあきなひをはじめて見さしやれ。
そのあきなひも、もとでしだいじや。もとの心あてはいくらほとある。太郎介
「今はなしたとほり、だんくのふしあはせて心にまかせず。もとのあてはかね
か二分こさる。じん六うちわらひ、「二分てはたなもたれぬ。はてこまつたもの
じやな。いつその事国へかへるがましであらふぜ、といはれて太郎介うてぐみなし、



米や
きぬ
きぬ
きぬ

▲うりだめのかんぢやうしてゐたりしか、「もし。そのおかたを米やへやつてはどうでござんせう。甚六「なるほどこりやよからふ。これ太郎介どの。子どもの時からしつたどしの事也。ことさらわしを見あてにわさくござつたとなれば、とのやうにもせわをしいけれと、たなをもたせてもとてまてとはちからにおよばぬ。そこで、今あれが米やといふたは、わしはめしをうるがしやうばいゆゑ、つきいれの米やかある。そのこめ屋に、ふみうすの米つきが三人ある。その内ひとりいとまをやつてかはりがほしいとて、わしにもたのんだが、きう金は米つきゆゑたんととれる。せたいもつてかせぐよりは、しんばうさへすれば金をのばすぞや。あるじはきね右衛門とて、ふうふながらきだてのよい人。米つきはねんぢゆうはだかでつとめる奉公。物のいらぬつとめなれば、心がけしだいでかねがたまるときゝて太郎介よろこび、目みえしてすみければ、じん六がうけにんにて米やきね右衛門がみせの米つきになりけり。

第五回 此きね右衛門といふは、十二、三のころむかふとなり、このししやうありて、まい日あそひにゆきてごをおぼえ、てんせいごにかしこく、十六のとししよだんにせいもくのごになりければ、今四十二にて二たんのとなり、四さればでしもありて二かいはこのけいこば、したはくろごめ白ごめのあきなひ、まんさらにあはぬげいでもなし。此けいにてかまくらのれきくへもたち入り、御ふちいたゞくおのへもあるゆゑ、つき米やなからもくろいはおりきは、ごといふ人がらのげいかあるゆゑなりけり。

その二 かくて太郎介といふ名はよひにくきとて太介と名をつかけられ、米つきをしてゐたりけるが、心の内におもふやう、われかまくらへいでかせぎ、おやのゆづりのでんぢをうけ、そのうへはかつてよくなりて、母にもらくをさせんとおもふゆゑなり。此ねかひをかなへるには、天たうさまにかあひがられねばならず、今さしあたつて天たうさまにかあいがらるゝことは、しゆじんへ忠義也。これうかくしてゐる所てなしとおもひこみ、まづ第一米をつくことにせいをいだし、ほうばいがやすむ所やすまねばわるいゆゑ、やすむひまには、

次へ

「七表



手習のししや
う

きね右衛門娘



太介

▲^{（勝手）}かつてにきたりて下女がかはりに水をくみ、あさも人よりさきにおきてみせさき^{（掃除）}をさうちなし、きれいに水をうち、あるじみせへいづればこしをかぐめてれい^{（礼）}をなすなど、ほかの米つきのせぬ事なり。けふはせつくとて、ほかの米つきはあそびにでるに、太介は十二になるむすめが手ならひのししやうさまへれいにゆくとををなし、かへりてみれば下女をあひてにけふのそうざい^{（敷葉）}こしらへてゐる女房のてつだいをなし、それをしまへば五ツになる豆太郎をつれてゆにゆきしが、やがてかへり、まめ太郎母にむかひ、「太介にからだぢゆうあらつてもらつたぜ。あしのつめまできとつてくれたと、子ども心にも太介がかあいがるをよろこびけり。これまことの心あれば、子どもにもむねのかぐみありてまことがうつるなり。めいとくをあきらかにすと大がくに見えしはむねのかぐみの事なるべし。つゝしむべし。」○

「八表



豆太郎

おきな

となりの子

太介

きね右衛門

つまおみの

●さて又、きね右衛門はこのげいにてゐるすがちなれど、つまのおみの、手もかき、
 よせざんもするほどなれば、ていしゆのるすには、みせにいで、帳めに付おとし
 もなく、おほかたの事はまにあへども、ふたりの子もちなれば、ばんたう一人ほし
 きとつねくおもへど、米の事しらぬものではまにあはず。しかるに太介が三年の
 あひた、しゆじんふうふはさらなり、ふたりの子とどものことばにもそむきたる事
 なく、忠せつをつくすを見て、ふうふさうだんのうへ太介に米つきをやめさせ、ば
 んたうにせんとふうふさうだんしたるその日のよ、太介おくへきたり、いとまのね
 がひをいだしけり。これは十両のきう金がたまりしゆゑ、今一年も奉公してかねこ
 しらへんとおもひしが、三年母にあはぬゆゑ、さぞかしあんじるであらんと孝心の
 なす所なり。さて、きね右衛門は、ばんたうにせんとおもふ太介がいとまのねがひ
 に心あてがちかひ、ふうふかは見あはせてしばらくあひさつなかりしか、きね右衛
 門「おのしがうけにんのめしやのしん六がはなしでければ、おのしは此かまくらへ
 かせきにきたとの事、いかさまかせぐ心かして、つねからしまつしてきう金をのば
 し、十両はたしかにあづかつてある。とても事の、今三年奉公してくれまいか。
 さすれば、ばんたうにして一年にきう金を十両やる。もつとも、此みせのばんたう
 に十両のきう金はだしにくいが、これまでのしんていにめでゝの事じや。三年つと
 めてくれ、ば三十両じや。その内にはむすめせいじんするゆゑ、むこをとりおれ
 はいんきよして、ごさへ〇〇打てあるけば、むこのせわにはならぬ。なんと今三年
 すぐてはくれまいかといふに、太介へんじをせず、しあんのていなりければ、きね
 右衛門が女房才ある女ゆゑ、太介がはらのなかをさと、「つねからおやおもひ
 のそなた、もしか、さんや内かたの事をあんじるなら、いつそふたりを此かまくら
 へよびよせ、せたいもたせて、かよひづとめにしてもよいではないか。なアもしだ
 んな、〇〇「それならこつちもなほさらあんしん。太介なんとおもふと、しゆじん
 があつき心といひ、三十両ときゝて心うごき、「だんくありがたいおぼしめし、
 わたくしはいかやうともいたしませうが、一おうは母へも申きかせとくしんさへい
 たしましたら、三年が五年でも御奉公いたしませう。あなたのおぼしめし、くはし
 く状にしたゝめてつかはしませう。きね右衛門「それなれば、おれがおでいりする
 竹川さまのおひきやくへたのめばじきにとゞくとはなしのなかへ、きんしよのかみ
 さま 次へ



ぬかかひう八

大神宮

「はいごめんなさいまし。おや／＼おきなさん、手玉がお上づにおなりだね。」「なんだかいつまでも子どもでこまります。さアこちらへと火ばちをかたよせる。これにて太介はみせへいでけり。

第七回 古歌に「人おほき人のなかにて人／＼に人といはるゝ人ぞすくなき」とはうべなるかな。その人といはるゝには、第一おやに孝をつくし、しゅじんに忠ならざれば、人と人にいはれず。忠孝の人は、人に人とほめらるゝのみならず、天たうさまのめぐみありて、おもはざるさいはひありし事むかしよりいくらもあり。太介も忠孝のものなれば天のめぐみにて、はからずさいはひをえたる事あり。そのよしは、太介いつものごとくみせにはたらいてゐたりけるに、いつもくるぬかかひのう八きたりけるに、かますのなかにふちづかのわきざしあり。太介いぶかりたづねければ、ぬかををさめる御馬やのちゆうけん（中問）にぜに五百かしけるが、いくたびさいそくしてもかへさず。けふもさいそくしたれば、これを五百にかつてくれとてせんかたなくかつたのじや。ときゝて太介ぬいて見れば地がねも見へぬほどさびたるものにて、つかはふちづるにてまきつめ、さやはかばにてまきたるもこゝかしこきれてある山がたな也。太介いふやう。「わしがさいしよを〇〇でた時わきざしをさゝなんだゆゑ、こしがさみしくて心ぼそかつた。これをわしにうらつしやれ。ざいしよへかへる時さしてゆくといいければ、う八」とてもあかいわしじや。ねうりもでけまい。きさまの事じや。もとねでうりませうととくしんしければ、太介みせにゐたきね右衛門が女房に、ぜに五百かりてう八にわたしけり。太介此わきざしを五百にかひてさいはひをえたるは、国をでた時おち川にて木ちゃんやどとまり、孝女〇〇おみつにぜに五百やりてそのてゝおやの百か日にくやうしたる善きやうのむくひなるべし。そのむくひあるも、すなはち天のめぐみなるべし。



俗名 京山作
豊国画

○さて、此日あるじはれのこにいでゝ火ともしごろかへりければ、やしよくはてゝ
のち太介かのふぢづかをもちきたり、あるじにみせて、う八より五百にかひ、その
せにはおかみさまにかりましたとくはしくはなせば、きね右衛門「いかさまこれは
ふるいものじや。なんぞめいがありそなものと、さびついたるつかをやうくぬい
てみれば、めいはなければどもつらなるといふもじ、つゞみといふもじと二字金、
さうがんにて入れてあり。此めいかなる心かわからざれど、やうすありげなれば、
「太介これを二分でかはんといふ人あらばうるか。」そりやえらひまうけ、うります
とも。「うる心なら心あたりがある。さびてもこのものじや見せの二かいの〇〇
よりあひべやへおくはわろい。おみのにあづけておけ。●をりからみせのしやうじ
からりとあけ、「かたなやからきました。いつもの米をもつてござれ。
めのとのさうしあとおひばなし上をはり

おみの

きね右衛門

俗名 京山作
涼仙 豊国画
国貞改
二目

〔九黒印〕

十裏

註3

東海道五拾三次続絵

奉書四ツ切 極上摺多当入 御進物宜敷品ニ御座候

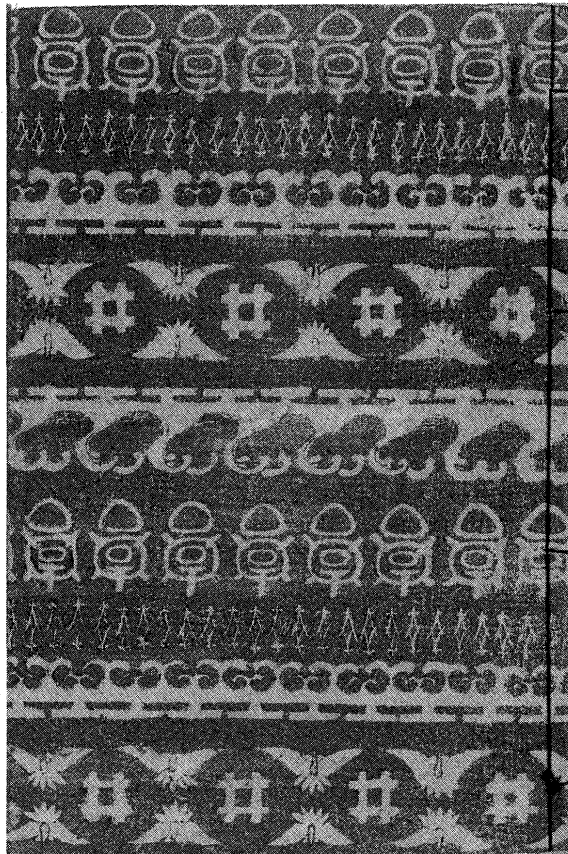
東海道 極彩色摺 女絵入風景五十三次絵 大奉書四ツ切 御箱入多当入

百人一首 大錦絵風流女画 全一陽齋豊国画 講釈入

江戸団扇類御詠物別 而念入 奉差上下直候

風流絵半切 新装新板物 沢山出来仕候 東千代紙 東都錦絵 団扇本類 卸店 東都芝神明前三島町角 佐野屋喜兵衛板 出来仕下直奉差上候

裏表紙見返し



(裏表紙の刷色は茶色)

めのとの
乳母さうし

あとおひはなし

跡追話 京山作

上下

新刻
板元
さのや

「二編上裏表紙

「二編下表紙



せがれ豆太郎

きね右衛門つ
ま

三編二

第八回 ^{くわい} かくてそのあくる日、梅がやつの竹川さまよりごにめされてきね右衛門
まゐり、この御あそびもはてゝのち、さまぐのさふたんのつひで、きね右衛門申
けるは「わたくしめしつかひの太介と申スもの、さく目かやうくの事にて
わきざしひとこしわづかのあたひにてもとめ候。その身はひら作りの大ばうしにて
〇一尺五、六寸ばかり、やきばも見えぬほどさひてをり候へとも、つらなるとい
ふもじ、つゞみといふもじを金さうがんにて入れ、ほかに作のめいはござりませ
ぬ。ぜんたい山がたなと見えまして、ふちづかでござります。つらなるつゞみとは
れんことよみませうが、だういたした心でござりませうと、竹川どのつるぎをこの
み給ふゆゑ、けふもめされてきたりたるかたな目きゝの人にたづねけり。刀目きゝ
これをきゝて「そりやれんことはよまぬ。しさいありてつれつゞみとよむもじじや
いづれにしても見たきものなりとはなすを、竹川どのきゝ玉ひ、「きね右衛門その
品とりよせて〇〇見せいとありければ、きね右衛門つまのかたへてがみをしたゝめ、
金太夫といふそばつとめの人つかひを 次へ

「十一表

めものさうし
乳母草紙下のまき

めもの
との
さう
し
下のまき
京山さく
豊国ゑがく

「表紙見返し



梅がやつ
竹川どの

きね
右衛門

▲たてければ、きね右衛門がつまをつとの手がみを見て、ふぢづかにへんじをそ
 えたるをもちきたりたるを、金太夫すぐさまさしいだしければ、竹川どのとくと見
 給ひ、刀目きゝの人にも見せ給ひければ、うちかへしくよく見て、又なかこ
 のやうす金さうがんのもじをも見て、竹川どのに申けるは、「さてくこれはめづ
 らしき品にて候。めいこそなければまさむねにて候。つれづみと名づけたるわけは、
 むかし赤松まん（備前）い（備前）う（備前）さい（備前）こく（備前）へはたらきし時、さふひやうに申つけ山みちをひらか
 せしに、一人のさふひやうひとこしをぬきて木をきるを見るに、くさるかるがごと
 し。まゐり馬よりこれを見てそのひとこしを（備前）こひとり、ぢんしよ（備前）においていけ
 どり（備前）を二人かさねい（備前）き（備前）どう（備前）をためしけるに、水もたまらずだんをはらしゆゑ、
 どうをかさねるといふ心にてつれづみと名づけ、さしれうとしてひさう（備前）〇した
 るに、おうにん（備前）のみだれにうしなひ、そのうち世にいでざるよし。わたくしせんぞ
 のかきものに見え候。かゝるでん（備前）らい（備前）もあるきたいの名作なれば、かならず御もと
 めあるべしと申ければ、竹川どのふたゝび見られ、そばにある刀かけへかけおき給
 ひ、「こりやきね右衛門此一トこしはかへさぬぞ、こりや金太夫今きくとほりの品
 じや、きね右衛門へよきやうにかけあひもとめよ。」「かしこまりました。〇四いか
 さまめづらしきしな、おんもとめありてしかるべし。きね右衛門こちへとおつきへ
 つれゆき、「ひとかたならぬ名作なれば、これまでしよ（備前）したるものゝ国所、名ま
 へならびにかひとりたるものゝぢゆうしよ名まへ、又かひしたるそこものけらい
 の国所名まへまでくはしくかきとり見せられよ。そのうへにてねだんはいかほと
 申ス事もかき付て見せ給へ。」「いやまうねだんはいかほどなりともくだされしたい。
 二分でうるかと申たれば、それではいかいもうけとけらいめが申た品。いかやうに
 もあなたからよろしきやうに。」「しからば身どもぞんじよりもあれば、まづ今申た
 かき付を次へ▲



赤松
まんい

▲今日中にはなるまいか「ともかくもやどへひとはしりいてまゐりませう。ごぜんへよろしくとて立さりけり。

その二 かくて時をうつし、きね右衛門ふたゝびきたり。金太夫か（望）のそみのかきつけのほかに、太介へぜに五百にうりたるうけとりをそえて見せければ、金太夫、きね右衛門にむかひ、「さてくきさまは正ちきなる人かな。此上は金子をわたし申さんとおくへ入り、やかて手ばこをもちきたり、「さてきね右衛門ねだんの事を目きゝの人にたづねたれば、めづらしき品ゆゑ、代はさだめがたとしと申さるゝといひつゝ、百両つゝみ一ツ〇〇ほかに小ばん五十両手ばこのふたにのせけり。きね右衛門うちおどろき、「ぜに五百にてかひとりたる品なれば、たいまいの金子にてさし上るはもつたいたくおそれ入り〇〇たる事なり。十両もいたゞけばたくさんなりといふ。金太夫「さてくきさまは正ちきなる人かな。〇〇さればこそ五百もんのうけとりも見せられつれ。さりながら、ねだんをろんずるは品にもよる事。こしの物は武士のおもてだうく、ことさらおさしりやうとなればながくおいへにのこる品。もとねたんいかほどやすくとも、その品のくらゐほどにてもとめざれば、おいへのこるだうくにはならず。ほりだしなどは、そりや町人などの申す事。五百もんにもとめたるを百ばいにして五十両、此百両はめづらしき品をさしたるほうびとして太介へくださる。きさまへは御ほうびかたぐゝ利よくをはなれたる正ちきなるしんてい、町人にはきどくなりとして三人ふち給はるよし。おつてさたにおよぶべしときゝて、きね右衛門かずゝれいのをべ、心の内におもふやうお武けさまは又かくべつな事と次へ▲

「十三表



▼つづき

かんしんなし、金のうけとりをしたため、ゆめのやうに百五十両うけとりけり。

第九回

さるほどに、きね右衛門やどへかへり、つまのおみのにも太介にもしかじかのよしをくはしくかたり、百五十両のかねをわたしければ、○◎太介大きにおど

ろき、「これはわたくしがものにしてもようござりますか、とおそろしがりければ、

きね右衛門、金太夫が申たる事。よくく五百ものの品を大金にうつたりともわけ

のたちし事なればきづかひなし。しやうにんはこのきね右衛門じや、ころづかひ

なくいたゞけといひければ、太介身をふるはせばんにのせたる百五十両をおしいた

だきく、天へもあがるよろこびがほ。「これと申スもだんなのおかげ、とかず

くれいをのべ、百両をのけあとの五十両を、「これはあなたさまへとさしいだせ

ば、きね右衛門「ころざしはうけたもどげん。わしにも今いふたとほり、御ほ

うびとして御ふちを給はりたればふそくなし。此金をわかつ心ならば、はじめうつ

た次へ▼

「十四表



きね右衛門つ

▼ちゅうげんへ二十両、ぬかかひのう八へ十両やるべし。うるもかふも目くらとて、しらぬふりしてゐては天たうさまにおそれありなと、さうじやないかとさとしければ、おやに孝しんなる太介「これは心がつきませなんだ、と大によろこびいかやうともよろしくあなたへおまかせ申ますとひんぐにせまる太介、三十両をすこしもをしまざるを見てふうふかんしんなしけり。かくてぬかやう八をよび、かのふちづか身がよき品とてよきねだんにうりたり。その利わけなりとて十両やりければ、よろこびたる事いふもさらなり。さて二十両いだしこれはもとのうりぬしへやり給へ、よきものともしらすしてうりたるはふびんの事なりといひければ、う八「正ぢきものゆゑしからばその人をつれてまゐるべ」と、やがてつれきたりければ六十ばかりのおやぢなり。ふちづかはもちつたへかときね右衛門たつねければ、いやわしがわかい時、はすをはるとてほりたしましたか身かなんともないゆゑ、山かたなに^{（年頃）}してとしころさしましたが、よくきれました。いかさまよい物でござりませう。此二十両もぬまからほりだしたやうなものやと、はた／＼よろこびれいをのべ、う八とうちつれてかへりけり。きね右衛門は又はからざるごふちにありつきしとて、神たなへみきをそなへていはひをなしけり。



ぬかやう八

太介

米やきね右衛門

第十回 かくてそのあくる日、太介あるじに申けるは、「さくばんしあんいたし候に、いたゞきたるかねをさいしよへもちゆき母にみせてよろこばせ、はんたうにしてくださるといふ事を母へもさいよへもはなし、ふたりをすゝめてかまくらへつれきたりせたいをもたせ、かねはあなたへおあつけ申、わたくしはやはり御ほう公いたしませう。きね右衛門「それはよいしあん「おれにあづければかねにも利をつけてやる。それにしても百三十両といふ大金をさいしよへもち〇〇ゆきはみちがあぶない、よしだがよい。「さやうではござりますが、小ばんなどはついに見た事のない母や女房、たくさん見せてよろこばせたうござりますと、孝しんなるをしひてよせともいはれざりけり。

此所へ一寸と口上

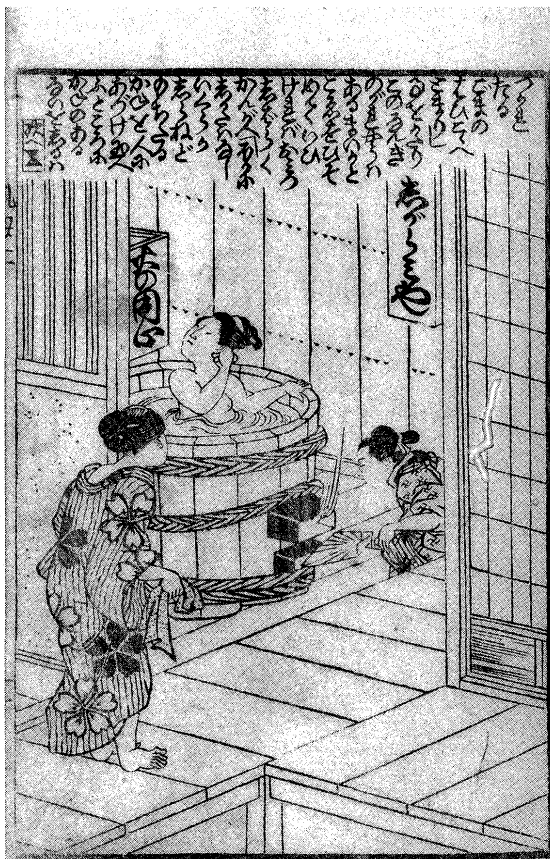
江戸京ばし銀ざ二丁目京でんみせ

▲とくしよ丸一つ、み一匁五分。第一きこんの薬ものおぼえをよくす。がんりきを^{（精氣）}つよくし、せいきをます。よはき人用ひて長寿する良やくなり。

▲女はらみ薬、くわいにん丹ねりやく一才五匁、半才二匁五分。女は五十こしても月やくみるうちははらむ事妙なり。男はかしらに霜をいたゞくとも、せいをつよくする事わかきにまさる▲十三味薬あらひこ一袋百廿二せん。いかほどのあれしやうにても一度用ひてかんばせ玉のごとし。



▲やけどきりぎずその外さまぐこうのうあり。
 ▲白牡丹。御かほの薬おしろい百十四せん。にきび、そばかす、あせもに妙なり。
 これはうすげしやう。としまのつけるによし。
 ▲くものうへ、おしろい五十九せん。極上々吉のおしろい匂ひ入り也。
 ▲あくぬき、えりおしろい、つけてはげす。半えりにうつらす。右いづれも此度ね
 だん引下ヶたる代付なり。相かはらず御用ねかひ上候。
 本もん さるほどに、太介は百二十両かくしもちてざいしよへたびだち、みちすか
 ら用心をなし、おそくたちてはやくとまり、すでにざいしよへあすはつくといふ
 日のひるごろよりふたりのごまのはひにつかれしゆゑ、おほえたるぬけみちへ入り
 てかいだうをすりぬけけるが、七ッさかりになりしゆゑ、よみちをかければざいし
 よへ入るべきを、ふところきづかはしく、四りてまへのしゆくにとまりけるに、火
 ともしごろかのごまのはひ二人このはたごやにとまるをものかげより見てうちおど
 ろき、とやかくしあんさいちゆう、ぜんをもちきたりたる下女太介を見て、「もし
 あなたは三ねんいせんの三月十日このさきのしゆくはつれ、おち川といふ所の木ち
 んやどへおとまりなされた太介さまではこさりませぬか、ときゝて太介ふしんをな
 しやうすをきけは、次へ▲



火の用心

しがらみや



おみつ

太介

▼このむすめがてゝおやの百か日のたいやとき、むすめが母へ孝しんなるやう
 すを見てひん^{（貧）}なるかいたはしく、ぜに五百やりたるおみつなり。あくる日、そのぜ
 にてぼたもちをこしらへ、百まん^{（万遍）}べんをしたるうれしさは今にわすれませぬとい
 ひければ、母の事をたづねしに、なみださしくみてきよねん母にもわかれこゝにほ
 う公しますとかたる。太介はひざ^{（膝）}ともたん^{（談）}こうとおもひ、みちよりつかれたるごま
 のはひこゝへとまりし事をかたり、このなんぎ^{（難儀）}のがれやうはあるまいかとこゑをひ
 そめていひければ、おみつしばらくかんがへ「ほかにしかたはなし、いくらかしら
 ねどもちたるかねを人にあづけ玉へ、ふところにかねのあるないをしるは」次へ▲
 「十七表



太介母

▲あれらがなかまの^{（伝授）}でんじゆのよし、馬士^{（ま）}がはなしなり。かねさへあづけ給へば
 ぢきにしりてはなれるときゝたり。太介しからばわけをいふてこゝのあるじにあす
 まであづけおき、あさつてはわしなりとも又はたしかなる人になりともとりにきた
 らん。おみつ「いやゝこゝのあるじはとしわかにて心だてもよからず。わたしは
 よいとは申がたし。太介しからばだうしたものであらふ。おみつしばらくかんがへ、
 あす一日の事ならばわたくしがあづかりませう。命にかえてもうしなひませぬ。む
 かしのごおん^{（思）}とおもへばこそあづかりますと、おもひ入れたるかほつき、母へ孝
 しんなりし心も見とゞけおきたれば、こゝろおきなく百二十両の○^{（開巻）}だうまきをあ
 づけければ、太介にふうをつけさせさしたるやすまきゑのくしを二ツにをり「これ
 をわりふにしてあなたなりと、どなたなりとかねをおわ^{（な）}□□□^{（中）}ますと、まきゑの
 くしのかたゝ^{（片方）}をわたしければ、太介いよゝあんしんなしけり。○

④その二かくて太介はあくる日四里のみちなれば、ひるまへつゝ^{（無）}がななくやどへか

つまおなべ

介はあたりとなりへ母をたのみたるれいにあるき、さて母へ十両みせて三年のほう
 こうをかたり、きうきん^{（給金）}をのばしたるよしいひければ、母もつまもよろこびけり。
 さて又ふちづかをもとめ百二十両にありつきたる事、みちにてごまのはひにつかれ
 たる事、おみつにあづけたるわけをもくはしくはなし、まもりぶくろよりおみつが
 わたしたるくしのわりふのかたはれをみせ、此くしのをれが百二十両になる也。こ
 れをしるしにもちゆけばたれにてもわたすやくそくなり。そまつにはならぬ、神さ
 まへあづけておけと女房にわたし、神だなへあげさせおき、母のさしづにておみき
 をそなへなどし、三年ぶりのわが子わがをつと一ツによりてめでた酒、母はくれ
 ぐも百二十両をよろこび、かまくらへひきうつる事もとくしんなし、水いらずの
 さかもりに太介も一はいすごしけり。⑤

太介

⑤第十回かくてあくる日、太介、おみつにあづけたるかねうけとり^{（マ）}にゆくとき、
 おなべ 次へ▲



▲くしを見るに神だになしときゝて、母も太介もおどろきさまゝにたづねても見えず。三人してたゝみねだまでもはなしけれどもなし。太介も母もとはうにく

おみつ

太介

べく蔵

れ、おなべはないてゐたりしが、「わたしがしまつておいたものなくなりてはおまへにいひわけがござりませぬと、かまをさかてにのんどへあてんとしたるを、母も太介もおしとゞめ、「おのしが命すてたとくしがでやうか、ばかするなとかまをとりあげけり。さておなべにむかひ、よしや、くしはなくともわしがあづけたもの、わしがとりにゆくにわたさぬはづはなけれども、かたくやくそくしたるくしをなくしたともいひにくきゆゑ、これまではさがしたれどなければせんすべなしとて立いで、四りのみちをいそぎおみつにあひ、くしをなくしたる事をわび、かねうけとらんといひければ、おみつぎやうてんなし「それはふしぎの事なり。けさの五ツごろ廿一、三の丸がほにいろくろく目の大きな男、おまへのおとゝじやとてし□のくしをもち、なにかやかの事おまへにきゝしてて礼をのべたる事ともしかなれば、だうまきはおまへがふうのまゝわたししましたとしやうこのくしをも見せければ、おみつをうたぐるべき○やうもなく太介きもをつぶし、さてはさくや母や女房へはなしたる事を立きゝしたるやつありて、神だなのくしをぬすみ、そもじにみせてかねうけとりしならん。さすれば、村のものに○ちがひなし。されども丸がほにていろくろく目の大きなわかいものいくらもあり、はて此せんぎはとあをくなりたる。小さくかたむけしはしあんのうち、おみつ「わたしがおもふにはなんとかいふて、だんなにひとばんのいとまをねがひ、今からおまへといつしよにおまへのおやどへゆき、わたしはかくれてゐて村でそれとおもふ人を酒のますとてよびあつめ給へ。その人ゝをわたしがすき見して、もしかかねうけとりにきた人あらばわたしがせりふします。悪人めが○しれぬうちはわたしもつながるなはめがぬけまいじやござんせぬかと、もつともなることばに太介うなづき、おみつがくるをたてはまぢあはせ、かごにのせていそぎけり。

その二 かくて村にいたりしは夕かたなりしに、おみつかごのなかより太介をよびみゝに口よせ、「むかふのみぞにつりをしてゐる男は、けさかねうけとりにきた人でござんすときゝて、太介これを見れば庄やの二ばんむすこべく蔵なりけり。○こゝに又べく蔵はかくともしらずつりをしてゐたりけるに、夕めし也と小女ろがしらせにつりをやめてやどへかへりけり。



小さう

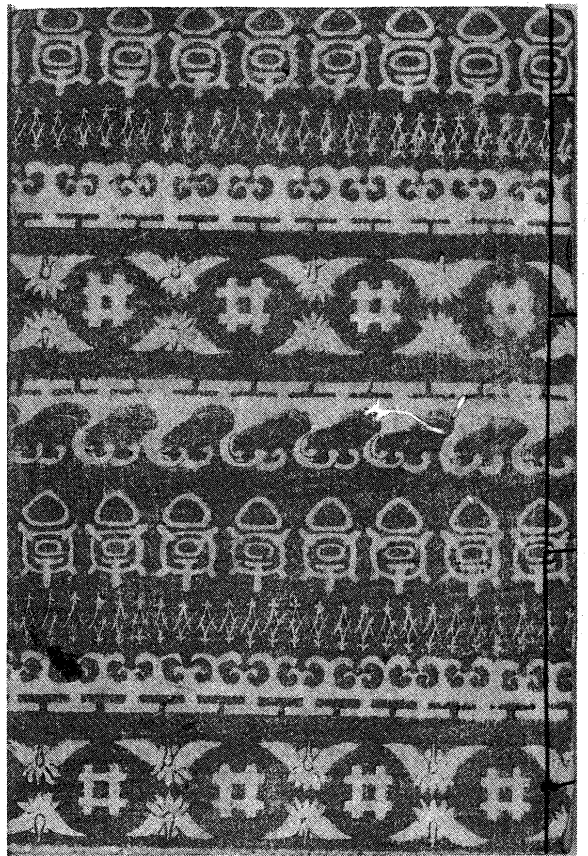
孫

妙清

第十回 べく蔵やどへかへり、だい所のゐりのはたにて母とせんをならべ、タ

めしくふてゐたる所へ、太介、おみつをつれて入りきたりければ、べく蔵、おみつ
が かほをみてきもをつぶし、はしをすてにけさりけり。太介おひかけんとしたる
を べく蔵が母そでをとらへてはなさず。やうすをたづねけるゆゑ、太介とおみつ口
を そろへだんぐのわけをかりければ母そのへんしはなく、べく蔵がへやへかけ
入 り、やがて太介がだうまきをもちきたり、太介にむかひ、「けさあやしき事を見
た るゆゑ、今さがして見ればあれがたんすの内に此品あり。あらためてみ給へ」とわ
た せば、太介心にうれしくあらためみれば百廿両すこしもたがはず、そのよいひ
け れば、母此上のなさけにはおふたりとも此事たごん給はるな。人の命一ツたすけ
て くだされと、しらがのばぐ手をすりてわびければ、金子一まいもかけもどし
う へはいひぶんなし。たごんはすまじとて立さりけり。●かくておみつをつれやど
へ かへりしにつまのおなべ見えす。母にきけばさいぜんうらへたといふ。太介こ
か しことよびあるきければ、くはをかたげてのらよりかへりたるとなりの六べゑ、
太 介をかたへにまねきこゑをひそめ、「こなたがかまぐらのるす、庄やのせなべく
蔵、おなべとなじみ、一年此かたの事ゆゑしらぬはこなたのおふくろばかり。
よ どまりしてあさかへるをわしが見たもたびく。今ものらで見たれば、べく蔵、
お なべをつれてゆくやうすたゞ事ならず。こなたがかまぐらからもどつたゆゑ、ふ
た りてにげたにちがひあるまいと六べゑがはなしに、太介心にさてはしやうこの
く しをおなべがべく蔵へわたしたるにちがひなしと、はじめておなべがあくじをし
り けり。○これよりのち、べく蔵、おなべさまのなんぎにあひ、つひにはおな
べ はかみなりにうたれて死し、べく蔵はおほかみにくひころされてあくのむくひあ
り し事。○それひきかえ太介が孝しん天のたすけをえて、つゝがなく百廿両も
ど り、おみつをつまとなし、おやのゆづりのでんちをうけもどしてしんるいへ○
あ づけ、母をつれてふうふかまぐらへうつり、金子を米やきね右衛門へあづけ、せ
たい をもちて母をやしなひ、しゅじんへやくそくのことく三年かよひづとめをなし、
し ゅじんのむすめむこをとりてのち、百廿両をもとにして、米みせをいだしは
ん じやうなし、おみつもおやに孝をつくしたるゆゑ、よきをつとをもち、のちには
く らニッ下女三人つかふ身となりけり。又、きね右衛門はほりだしのまさむねを竹
川 さまへ上に、太介が五百文にかひたるうけとりまでつけてあぐるほどの正ちき
ふ 正の利にふけらざるを天たうさまよろこび給ひ、おもはざるごふちにありつき、
そ のうち所々よりもごふち玉はり、むすめにむこをとりしにそのむこも孝しんにて、
き ね右衛門のぞみのごとくらくといんきよなしけり。○これらみな善行をした
る 人たちゆゑ、天のめぐみをえてとみさかへけるなり。そのせんぎやうといふも、
わ が心の一ッよりおこるなり。たれもわろきことは

次へ



（裏表紙の刷色は茶色）^{註5}

二編 註

- 註1 津村涼庵編の見聞録。十五卷。寛政七年（一七九五）。本文に卷六とあるが『譚海』（『日本庶民生活史料集成』八卷。三一書房 一九六九 所収）によると、卷七中の「武州熊谷農夫妻の事」にある。
- 註2 『大学』第一段第一節に「大学之道、在明明徳」とある。
- 註3 第二編上裏表紙見返しは、翻刻の第三編上裏表紙見返しと同じ。（市立米沢図書館所蔵本による。）
- 註4 松江重頼編『毛吹草』寛永十五序（ゆまに書房 一九七八）に、「二人の好士より三人の愚者 膝ともだんかう」とある。
- 註5 第二編上及び下の初刷りの裏表紙の刷色は青色。（市立米沢図書館所蔵本による。）
- 註6 第二編下裏表紙見返しに翻刻を下に掲げた。（市立米沢図書館所蔵本による。）

二編下裏表紙見返し^{（註6）}

二編下裏表紙

天保六十乙巳新年版稗史目録

| | | | | |
|---|--|--|--|--|
| <p>教訓乳母草子 きやうくんのとさうし 山東庵京山作 初編四冊 一勇斎国芳画</p> | <p>同二編跡追話 にへんあとおひはなし 同作 二代一陽斎豊国画 全四冊</p> | <p>紅粉絵売昔風俗 べにあうりむかしふうぞく 墨川亭雪麿作 全六冊 溪斎英泉画</p> | <p>西国^{さいこく} 月^{つき}の夜神楽^{よかぐら} 奇談^{きたん} 五柳亭徳升作 初編二冊 初 国芳画 一英泉画</p> | <p>絵本楠一代記 えほんくすのきいちだいき 烏有山人作 全五冊 歌川国芳画</p> |
| <p>前太平記^{ぜんたいへいき} 遠霞平安城^{とんかへいあんじやう} 楽亭西馬訳 四冊 歌川国芳画</p> | <p>同二編 驢猿嶋内裏 つなぎむさるしまたいり 同撰 同画</p> | <p>同三編 念力弓勢誉 ねんりきゆんぜいのほまれ 同断 同画</p> | <p>森羅万象多異事雑談^{しんらばんじやうたふことばなし} 全四冊 西馬戯作貞重画 おのくそのふんげんによりてえい枯せすいをかたるおかしきうし也</p> | <p>東都芝神明前三嶋町角 佐野屋喜兵衛発行 #</p> |



三編上

乳母草子

めのとの
さうし

教訓

きやうくん

〔丸黒印〕
『村松』

「三編上表紙」

紙
三編
上下

めのとのさう
乳母草

京山作
豊国画

弘化三年
午春喜鶴
堂寿梓

〔黒印〕
『百鶴』

「三編袋」



○『九黒印村杉』
としころふみやにこはれつゝ、はかなきさうしをこしもまた
おりたちて硯の海にあされどもみるめかひなきもくずなりけり

山東庵

「一表

弘化二年乙巳仲春稿本、同年秋上梓為、午春新板以發販。

京山作
豊国画

京水
『九黒印』
補空力

教訓
めとの
乳母
草子
さうし
三編上

弘化三年春喜鶴堂寿梓
「表紙見返し



○古事記の黄泉の段を案に、伊邪那岐の命、御妻の伊邪那美の命をしたひ玉ひて黄泉の国へいたり玉ひし時、醜女といふ鬼魅いで、命をおひかけければ、みことおんかしらのかざりにかけ玉ひたるくろみかつらをなげ給ひしかば、これをぶだうのみとおもひてくらはんとするひまにはせさり給ひしが、又おひかけければ、右の^{（黒御）}みびんづらにさゝせ玉ひたる櫛をひきかきてなげ玉ひしを、生簀とおもひて食ふひまに逃玉ひにけり。此事くはしくは、本居大人が古事記伝の九の七十一まい目にみえたり。又、神代の櫛の考は我が作の歴世女装考にくはしくかきのせつ。○さていさなぎのみこと櫛をたけのことおもはせんとてなげ玉ひしを、かのしこめそれとおもひてくひたるよし、古事記にみえたれば、竹の子は神代より○人のかくひ物なりし事あきらかなり。今も人のやぶあるひはみちばたなどにこゝろよくおひでたる竹の子をみては、はきものなりとの竹の子につけて一ツのものがたりあり左のごとし。



めのとのかうし
乳母草紙三編

○第一回 今(いま)はむかし、かまくらべに(紅ヶ谷)がやつに、ごくらくめんといふぜんでらありけり。(頃)ころしもさ月のころなりければ、(百日紅)さるすべりは所の名のべにをそめて百日のくれなるも、うば玉のよるはさつきのやみに(文目)あやめもわかず。さはの(水)はたるもよひには人(人)におはるれど、ふけゆくそらに風さへなければ、うちむれたるひかりは、(草)ぐんしゆさんもん(山門)のもじもよむべし。かゝるをりしも、たゝく(水)くひなのおとにさへ(出雲)あとさきうかゞふたりづれ、女はとしごろ十七、八、男は廿二、三ばかり。いつもの神にすてられて、むすぶよしなき身のつまり。をとこ女にいひけるは、「あのとらのかきねのもとにしばしやすらひて、ともかくもゆくさをさだむべし、とたゞずみけるに、此かきはこれごくらくめんのかまへなりしに、かきを内よりやぶりて人のいでたるを、むらがるほたるにみれば、ほゝかぶりしたる男(こ)こしにかまをさし、竹の子をたき木のごとくからげたるを、かきのやぶれよりひきいだしてかたにかけ、あしばやに(木)にげさりけり。をりしもくひのななくかときけば、このてらの夜半のつとめにや、もくぎよのおとかすかにきこゆ。男これにみゝとまりて、今、竹の子ぬすみ(木)がやぶりたるところより、(寺)てらの内をほしあかりにすかしてみて、女になにやらんさゝやきければ、うちうなづきててらのうちへしのびいりけり。」



○第二回 ^{だいに}かくて男あたりをみまはし、やぶの下かげに立より、用いたるふろしきをしきて、そのうへにふたりひさをならべ、女にむかひ、「むかふのあかりは本^{（ま）}だうならん。ほとけもおはし玉はん。^{（たま）}らいせはおなじはすのうてな、おたのみ申^{（まう）}はほとけさま。こゝからをがめと、しばらくねぶつとなへ、ほしあかりにかほみかはし、ためいきをつく男のさま、おくれてみえければ、女「こゝで身をはたせば、おてらさまのおなきにて、ふたりのなきながらをひとつにかくし、一へんの御^{（ご）}あかうもしてくださんしよ。さすれば、おなじはすのうてな、さやうにおもへばこそ、おてらのはへしのびりたれ。みつければおひいだされん、さあくはやくわたしやはすのうてなが見たいはいなア。「よいかくこ、すぐにあとからゆくをまて、と用^{（もち）}いたるではう丁、女^{（おんな）}のむなぐらしかととりなむ。あみだぶつのうしろよりむんずとくみつき、「どろばうみつけたみなこい、とよばゝるこゑにはせくる大ぜい。①いひわけはみゝにもいれず、せなかあはせのぼうしぼり。此さはぎにをしやうもこゝへきたりければ、めしたきこん介、もちたるてうちん、しぼりし男の②かほにさしつけ、「だんなごらうじまし。まいばん竹の子をぬすんだはこやつでござります。やぶのなかにつけてゐて③かにかくはれたそのかはり、こいつらふたりやぶへくし、かにせめさがせめてのはらいせ。「こん介さうだぞ、さあこいとひきたつるををしやうおしとめ、「ふたりがすがたをみるに、竹の子ぬすむやうすにあらず、ときいて男かほをあげ、

次へ

「四表



をしやうさま

▲「さやうでござります。わたくしどもは、といふを、ごん介「ヤアいふなく、此ではう丁と大ふろしきがたしかなしやうこ。竹の子をきつたあともある。はう丁ですはくやらかし、此ふろしきへつゝむくめん。ふといやつめ、さあて、とえりくびつかめば、はかもり男もたちかゝるを、をしやう「やれまてごん介。よしや竹の子をぬすみたるにもせよ、しばるなどゝはそりやさいけですること。いけんいふて心をあらためさするがしゆつけのやくめ、なにはともあれ、そのなわといてやれ。てらにて竹のこぬすみをしぱりしなどゝ心ある人にさげしまるゝは心うし、となさけのことばに、心つよき男どもゝげにとおもひ、なわめをゆるしければ、をしやうふたりをくりへつれゆきけり。

その二 かくてをしやうは小ばうづをおこしてしよくだいをてらせ、かのふたりをみるに、ちかきあたりにはみしらざるものどもなれば、いづくのものぞたとねければ、所はいはず、たゞおみのがし給はれとはちりたるやうすなり。ごん介か

も介

やうふろしきのすみのしるしに目をつけ、「こりやこれおぼえある。松ばがやつにて、うとくの人ふくとくや万右衛門がおくでつかふふろしき。又、此はう丁にも山がたに万のじのやきいんあり。これもふくとくやのれんのしるし。さすれば、そちたちはふくとくやのしもべならん。此てらよりふくとくやまでは一りあまり。へだてたる所より竹の子ぬすみにくるはづなし。してみれば、かきをやぶり此てらへ

めしたき
ごん介

しのび入りしはしいあらん。○◎それを申せ、たゞ見のがしくれよとばかりにてはふろしきといひ、はものといひ、まことのぬす人といはれても、いひわけはあるまいぞ、と理につめられて、男かほをあげ、「今はなにをかつゝみ申さん。いかにもわたくしどもはふくとくや万ゑもんがしもべ。わたくしは茂介、これはおさんとて

松ばがやつ町
福とくや

奥

おさん

ふろしき

こしもと。ふとした事よりなれそめしに、さく日おさんが母万右衛門方へまゐり、やくそくのむこを引とりたるゆゑ、おさんがながのいとまねがひもかなひ、

次へ

五表



▲あすはざいしよへつれてまゐるやくそく、とても此^世よてはそれはぬわれく。
 此よをさりてごくらくへまゐり、はす^{（進）}のうてな^{（台）}にてふうふにならんと申かはせしが、
 こしのももたざれば、こよひふくとくやをかけおちいたす時、だい所^{（死）}のでは
 う丁、しぬときしたへしかんとて、ふるしきはおさんがもちいだし、すみれがはら
 にてしな^{（死）}んとおもひ、此所をとほりしに、此おてらのかきをやぶり、竹の子ぬすみ
 がいでしをみて、とてもしぬならばおてらの内へしかい^{（死）}をのこさば、かいみ^{（威名）}やうも
 つけてください、ほとけさまにもすくはれて、はす^{（進）}のうてな^{（台）}にものれんと、①①
 それゆゑしのび入りました、と茂介がかるををしやうき^{（威）}て、かを^{（威）}はらひたるう
 ちはをはたとうち、「いやこれはけしからぬこと。こゝでしなれてはわしがめいわ
 く。竹の子ぬすみとおもひとらへたは、わしがしあはせ。そちたちもしあはせ。さ
 てふくとくやのめしつかひならばよそにはせぬ。そのわけは、わしはふくとくやの
 ぼだいしよ長命寺に久しくをつたもの。それゆゑ、ふるしきのしるしにもおぼえが
 ある。此てらへはこのはよりじゆう^{（住）}しよくする。それはともあれ、今きけばこの
 よでそれはぬゆゑやいばにかゝりごくらくにてはすのうてな^{（死）}にのらんとうらだなも
 つやうにこゝろうるは、ほとけのみちをしらぬからいとやすげにおもふはもつとも
 しごく。あは^{（阿）}うものはみなさやうにおもふゆゑ、^{（浄）}上るり又はきやうげん^{（狂言）}などをみて
 よき事とおもひ、やくそくさへかたくすれば、まちがひなくはすのうてな^{（死）}へのらるゝ
 とおもふはおろかなる事なり。そもく、

次へ▲

「六表



かんになすれ
ばなる事のけ
んくわ

むやくのせつ
しやうするば
かもの

とどめてやる
せんにな

▲はすのうてなへる人は、此よにおいておやに孝をつくし、しゅじんあるものは忠をつくし、かりそめにもうそをつかず、よくにふけらず、いろにまよはず、^{（無益）}むやくにものゝいのちをとらず、よしなき事にはらをたてゝ人といさかいせず、人のみちをつゝしみ、ほとけのいましめをよくまもりたるうへにて、あさゆふねんぶつおこたらざる人、天よりうけたるじゆみやう^{（奉命）}ほどこきて、此よをさりたる人でなければ、ごくらくのはすのうてなにの事はならず。しかるに、おろかなるわたくしの心をもつて、手まへがつてにほとけのみちをはかり、此よにてかたくやくそくさへすれば、ぞうさもなくはすのうてなへのぼり、たれはぐからずふうふにならるゝとおもふから、^{（死）}しにはぢをかくものまゝあることなり。此しにはぢをかくやつにおやかうゝの人あるや、しゅじんに忠なる人あるや、しんぢゆうしておやにはぢをかくせ、なげきをかけ、とくしん^{（得心）}とはいふものゝ、女をころしたる大あく人、いきを引とるとそのまゝ地ごくへまつさかさま。まちまうけたるおにども、男も女もかいつかんでえんま大王のまへゝひきいだせば、おやになげきをかけしつみ^{（罪科）}とが^{（浄波）}じやうばりのかゞみにうつり、しのびあひたるかげまでありゝとうつれば、いちごんのいひわけなく、男はつるぎの山へおひあげられ、女はちのいけへ○◎なげこまれ、此よでこそおもひあふたるなかなれ、此時にいたりては、かほみる事もならず。日に三どよに三どのせめく^{（責苦）}にあひて、はすのうてなはゆめにみる事もならず。○◎そもゝ心中してしぬやつは、みなおやにふかうの心かりする事なり。おやにかうゝすべき事、此をみてしるべしとおしやう一ふくのかけものをいたし、茂介、おさんに見せたるそのゑ左のごとし。

「七表



幽篁庵^註
むし
の
こゑ
萩のそよぎの
さびしさを
雨にゆづりて
ふける
秋かな

母の恩を知る話^{おんしはなし}

およそ女にうまれば子をうむべきものゆゑに、その子をそだつためにちゝといふものあり。これ日のてらす所のせかいの国々女にちゝのあらざる事なし。さればよしあるおん方はかくべつ、いやしき町人などのつま、おのれちゝありながらうばをおくは、ちゝをこしらへておき玉ふ天たうへもそむきたるおごりなれば、たきもりはおくとも、ちゝは母がのますべき事とある物しりがいへり。○さて人うまれて、七才までは母のおん、父にまされり。いかにとなれば、たねをやどしてより十ヶ月は身もちたべものに心づかひをなし、さてさんにのぞみて身をくるしめ、やすくうまれてのち①②かのおごりのうばをおくちからなきは、母のちぶさにてやしなふ。そのせうに、はゝのちをのむこと一日に一合づゝのまざればそだゝず。一ヶ月には三升、一年には母のちをのむこと三斗六升にして、二才となる。二才になれば、一日に二合のまざればそだゝず。されば、一年に母のちゝ七斗二升のみて、三才となる。三才は、一日にちゝを三合のむを天すうとす。一年母のちゝ一斗八升のみて、三才となる。三才までに母のちゝをのむこと二斗六升にして、四才となる。これみな母のにくをそぎくらふにひとし。また、此二斗六升のちをのむとき、母のあはれみをうくる事いづくぞや。そのおんもまたいくばくぞや。さて十才以上よりは、父のおん母よりふかし。父は天なり。子をてらしやしなふことくさ木のごとし。母は地なり。ちかく子をあはれみそだつ事、くさ木の地にやどせるがごとし。からすだに、はんぼの孝あり。ましていはんや、人としておやに不孝なるは、からすにもおとれり。つゝしむべしつとむべし。

「八表



たい所の
とやにて

ふくとくやば
んたう

うゑ木や

○さて、をしやうは右のゑをおさん、茂介にみせて、右のごとくゑときをしてきかせけれども、心中してしなんとせしばかものなれば、はらへはしみざれども、ばんのふのねつはすこしさめてみれば、はすのうてなのためすくなきをしり、地ごくのせめをもおそれければ、●も介「だんくのおなさけありがたうござりますしめる事はやめにいたし、いづくへなりともたちのきませうといひつゝ、かのほう丁をふるしきへつゝめば、●をしやう「これ、も介。かりそめにも、はものをもちててらへしのび入りたるふたりのもの。そのまゝにはかへされぬ。ことさらふくとくや万右衛門はしる人なれば、人をつけてひきわたさねばせけんもすまぬ、といひきかす。をりしもさいぜんのさはぎに目をさましたる地かりのうゑ木や松五郎、「もしだんな、今こん介にききました。けしからぬ事がござりましたね。「さればよあぶない事であつた。それにつけ、今おのしをよびにやるところじや。ほかでもない、このふたりは、おのしもしごとにつた、ふくとくや万右衛門がめしつかひ。万右衛門へひきわたしてもらひたい。まさか、ぼうずどもにも、させにくい。○きのどくじやがたのまれてはくれまいか。「いかさま、たゞの事とはちがひ、わけをいひてひきわたし、ひきとりのかきつけもとらねばなりますまい。それにしても此五月のみじかよ、今によが③④あけませう。女は、おてらへはねかされまい。わたくしがあづかりませう。をとこは、こん介がかやへいれてよをあかさせ、あすの事に⑤なされまし。「いかさま、まう七ツでもあらうかへ、とけつかう。」

○第三回 さて、おさん、も介がほう公するふくとくやといへるは、くらの五ツもあるあきうど、あるじ万ゑもんは三十七、八次へ



おさん

つきへ

▲つまのおかねは三十一、二、ふうふとも妙せいといふ母に孝かうなる心なれば、
 いへのしまりもよく、ひかるものたくさんあれど、町人の町人たる事をしりて、つ
 ねにはきぬけを身につけず。口もおごらざれば惣ざいに上下をわかつたず。もらひた
 るさかなあれば、又やりをせず、けらいにもくはせるは、くれたる人のころざし
 をむにせぬとなり。うるふあるとしは、ひとときのきう金ひと月よけいにやるなど、
 人のせぬ事をも心づけてやり、きやくのわすれたるあふぎにはふだをつけてのけお
 くほどのしつけなれば、あるじふうふあさねした事なし。これみな母の妙せいがし
 おきたるかふうなり。されば此妙せいはていのしさんがはくにもおとらざるけんぢ
 よなり。その身もちのたゞしき事、人の手本となるべきことはこのゑさうしの
 ぜんへんをみてしるべし。○さてくだんのごとく、とりしまりたるふくとくやなれ
 ば、めしつかひも○身もちあしきはなかりけるに、みせのわかいもの茂介、こし
 もとのおさん、さくばんよりゆくゑしれず。あるじのつまはころさとき女なれ
 ば、かねてふたりへ目をつけこの八月はふたりともいとまやらんと、ころにてん
 をかけおきたれば、けさやどをよびよせあれらがしなくをあらためてわたし、

「十表

喜鶴堂新刻藏板諸品目錄

| | | | | | |
|---------------------------------|---|----------------------------------|-----------------------------|---------------|---------------|
| 東都錦繪團扇本類卸店 芝神前三島町 佐野屋喜兵衛梓 | 百人一首 講釈入 大錦繪風流女画 陽齋豊国筆 追々出版 | 新江戸團扇類御詠物別 而下直仕奉差上候 国貞改二代目 | 東海道五十三次続綿絵 奉書四ツ切 廣重戯画 | 東千代紙新形御進物御箱入類 | 風流画半切類御箱入御望次第 |
|---------------------------------|---|----------------------------------|-----------------------------|---------------|---------------|



喜鶴堂新刻藏板諸品目錄

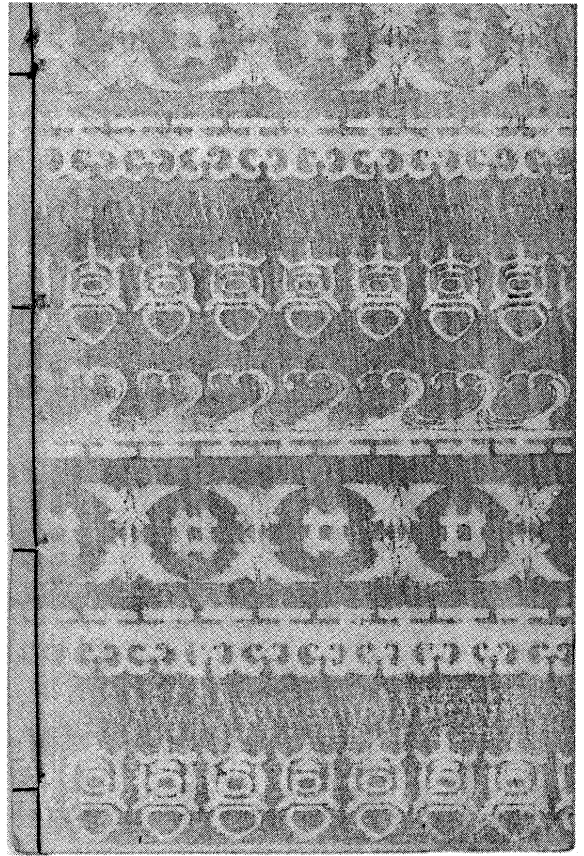
| | | | | | |
|---------------------------------|---|----------------------------------|-----------------------------|---------------|---------------|
| 東都錦繪團扇本類卸店 芝神前三島町 佐野屋喜兵衛梓 | 百人一首 講釈入 大錦繪風流女画 陽齋豊国筆 追々出版 | 新江戸團扇類御詠物別 而下直仕奉差上候 国貞改二代目 | 東海道五十三次続綿絵 奉書四ツ切 廣重戯画 | 東千代紙新形御進物御箱入類 | 風流画半切類御箱入御望次第 |
|---------------------------------|---|----------------------------------|-----------------------------|---------------|---------------|

〳ひきとりの一札とるべしと、ばんたう忠七へいひつけおきけるに、やどのつか
 ひもまだやらぬあさめしまへ、かのうゑ木や松五郎、おさん、茂介をつれきたりし
 が、このいへへ、し事にきた事ありてかつてもしりたれば、忠七をよびいだし、ご
 くらくるんの口上をのべ、さくばんのやうすくはしくかたり、かのはう丁とふろし
 きをわたし、ふたりをひきとりしよしの一札をくれよといふはもつともなれば、す
 ぐさまきてわたしければ、松五郎はばかもふたりをわたしてかへりけり。〇さ
 てあるじふうふはぬさいをきゝて、ふしぎの命をたすかりしゆゑ、万右衛門が名の
 いでざるをよるこび、ふたりへはいちごんもいはず、〇やどのくるまでとておさ
 んは二かいの女べやへあげてとしまの下女をつけおき、茂介はものおきぐらへ入れ
 て下男二人つけおきけり。

京山作
 豊国画
 丸黒印
 巴山人

「十裏

「裏表紙見返し



(裏表紙の刷色は青色)

京山作

豊国画

弘化三

辛午春

喜鶴堂寿梓

「三編上裏表紙

「三編下表紙



めの
との
さうし
下の巻

〔角黒印〕
『京水』

京山作
豊国画

さのや発販

「表紙見返し

めのとのさうし
乳母草紙三編下

さるほどに、あさめしきすみ、万右衛門がせがれ万太郎は、つくゑをいだして手な
らひをはじめ、母のおかねはかひ鳥のかなありやへゑをやりてゐたところへ、母
の妙せい、くらのうしろのいんきよより、下女のおはつをつかひにて、おさん、
も介へいひきかす事あるゆゑ、いんきよへよこせとの口上。万右衛門これをきゝ
て、今にもやどがくればひきわたすふたりへいけんはいらぬ事とはおもへども、お
やのいふことばそむかぬ万右衛門なれば、かのふたりへ此よいひつけければ、つ
ねからやかましきいんきよさま、したゝかしからるゝことと、おづゝ妙せいがま
へにいでけり。○さて、妙せいはいつくゑによりて本をよみてゐたりしか、目がねを
はづしてつくゑをおしのけ、「ふたりともこゝへきやれ、とちかく○〇〇よらせ、「こ
れおさん、茂介もきけ。おのしたちもつねにきくかなありやのさひづるもつまこふ
時いたればねをいだす。ましてや④人じやもの、そのとしごろにいたればいもせ
のみちをおもはざらんや。たゞその心をつゝしむとつゝしまざるとは、心一ツのも
ちやうにあり。そもくのはじめをつゝしめば、まよひのやみも

次へ

「十二表



ともしにす
められても
ちのおやを
すれずわい
所へあしを
けぬむすこ

人にそその
かされても
ぬ事とおも
なをして身
つゝしむす

▲はれて、身をしづむるふちへははまらず。今、おのしたちへ此よなこいふは、
 〆六日〃のあやめやくにたゞず、ちりづかへはかしておかん。それにしてもおさん、
 おなかにおびでもしめたか、「いへくさやうな事はちつともござりません、」を、
 よしく、命をかけておもひつめたがふびんなゆゑ、わしがそはせてやるぞと、か
 たいいんきよがやはらかきことばに、ふたりはかは見あはせてうちゑみつゝ口をそ
 ろへ「ありがたうござります、とうつむきたるおさんがまげをちんがなめたるをか
 しさを、妙せいはせきにまぎらし、「こりやも介。おさんをつまにしてくらしかた
 はなんとする。」「はい、トしばらくかんがへ、「わたくしがいしよにをつた時、たば
 こをきぎましたゆゑ、たばこの小うりみせでもいたしませう。」「それなら、いま
 こゝでふたりにさかづきさすべしとて、妙せいが〇〇つかふ下女のお初をよび、
 けしきばかりののしこんぶ、おはつがしやくにてさかづきもすみければ、ふたりは
 〆形式〃ゆめのおもひをなしけり。●さて、妙せい「こりやも介。わしがなかうどすれば、
 〆未〃すゑかけてそはせんころ。それにしては、此おさんが身もち心もちもはなしてお
 かねばならぬ。一ッいへにはう公したればあらまはしりつらんが、いもせをかた
 らへはあしきもよく見ゆるは人のつねなり。そもく、此おさん、十六の秋ころよ
 りおくでつかひしゆゑ、よるくは手ならひもせよとてわしが手本かいてやりたれ
 ども、ふでをとればぬねむりをなし、ををうますればひるもぬねむり、口はべら
 くきけども口上はいひえず、かみは半日かけてもあめざいくのあねさまなり。せ
 と物こはすはふだんの事。〇四〃ふだがみもよめぬくせに、いたことやらをうつした
 は、みゝすののたくり。つぎものはできぬゆゑさせぬさうじやが、ぬかぶくろさへ
 はり目がそろはず。男さへみるとしりかしらをなでるが、ほゝのあかいはなでゝも
 なほらす。ことし十九じやが、をりくはしそこないもあるげな。茂介は十二のと
 しからおくで二ねんつかひ、みせへだしてもこれまでつきへ



ふくとくやつ
ま

おはり

なにをさせて
もやくにた
ぬ下女

「おちどもなかりしゆゑ、ふびんじやからいふてきかす。なんと此よなすたりもの、おさんを、よの中に女もないやうにいのちまでかけしとはあまりなるあほう。目のさむるは今じやが、なんとこれでもおさんをつまにする心か。どうじや、茂介へんじせよといはれ、おさんはいち／＼身におぼえあればかほをあかめ、茂介は、あをくなりて小くびをかたむけけり。」

その二 やゝありて、茂介かほをあげ、「わたくしはさほどにもおもひませぬけれど、おさんがひたすらすゝめますゆゑしぬ心になりましたは、わたくしがあやまり。おさんにはむこもきまつてをりますればわたくしはよしませう。●妙せい「いや、よしませうとはかりではすまぬ。一たん男がかくごをきはめてやくそくしたを、ほぐにされてはおさんがすむまい。此よでさかづきたつまなれは、ふうふは二せとみらいをたのみ、おさんをこゝでさしころせ。おのしがかいしやくは、わしがしてやる。此たんたうはわしがたしなみ、さあおさんをさしころせ、とさしつけられたるするときとばにふたりは身をふるはせ、かのごらくゑんがをしへさとしたる地ごくのことをかたりければ、妙せいうちうなづき、「しんじゅうしてあくみやうのこすあほうものいくらもきゝしが、おてらのいはれたとほり、おやふかうの大あく人。だうしてごらくへゆかるゝものぞ。おぬしたちのやうに目をさましてくれる人があらば、心中してしぬるあほうもあるまいに、まよひのやみに心もくらみ、うき名をのこすはふびんな事じや。それはともあれ、そちたちふたりしぬきはないな。」「いやまうさつはりおもひきりました。○妙せい「しからばおさんとわかるゝか。●も介「さやうでござります。●妙せい「それならさる状かけ。」「それにはおよびますまい。」「いや／＼今あらためてさかづきさせたれば、しばしなりとも女房じやと○四さる状かゝせ、妙せい「これおさん、をつとにさる状かゝするも、かゝせざるも女房の心一ツにある事。いままでのやうないくぢのない身もちをすれば、此のちとてもさる状 つぎへ」



下女おはつ

妙せい

茂介
おさん

▼▲もらふ事があるぞ。そちが身もちのわるい事、いま、茂介へいふたのはそちへのいけん。茂介はおやのゆるさぬいもせ。それよりはおやのゆるしたむこ、いやとおもふはじめのうち。をつとはだいいじにするものとおもふ心がつゆあれば、をつとがむねのかぐみにうつり、うれしとおもへばうれしくなり、なぜきらひしかとくやむのはわかいをなごにはあるならひ。此さる状はそちが身のまもりにして、此妙せいのごとばかならずわするゝな。としのよりたるひとりの母へくらうかけまいとこゝろがけさへすりや、てんたうさまからふくをさづけてくださるぞ、としんせつなることば。をろかなるおさんが心にすこしはしみけるや。はいくといふたびに、なみだほろくおとしけり。○かくておさんが母きたりければ、さくやの事はすこしもいはず、ねがひのごとくいとまをとらせ、茂介がやどもきたりければ、これにもさくやの事をいはず、人べらしのいとまとてつれかへらせけり。これみなばんたう忠七がはからひにて、いとまの人にきずをもつけず、くちかずもきかずすましたるは、よきはからひとあるじもよろこびけり。此ふくとくや万右衛門は母に孝なるゆゑ、母の妙せいへ下女ふたりつけおかんといひけれど、妙せいがかてんせず。ふたりはおごりなりとて、お初とてことし十七の下女ひとりをつかひけり。此おはつ忠義はさらなり。ひとりの母へ孝しんにて、下女の手本となるべき事、つぎくをよみてしるべし。かのおさんもこのおはつもおなじ下女なれと、こゝろだて身もちのぜんあくにかはる事、心のひとつにあり。加賀の千代女が句に「せんなりやつるひとすぢの心より」此くは、○◎せんなりといふことば善也と孟子のふることによそへたるよきいましめの句なり。又、秋色にも心ふかき句あり。次にいだす。

○此所へちよと口上、江戸京ばし銀座一丁目京伝みせ▲とくしよ丸一包百三十二せん。第一きこんのくすり物覚をよくす。ものにくつたくしてこゝろのつかれたるとき、二りうかみくだきてのめば、そくぎにうつきをさんじ、心はつきりとなる事妙也。大人小兒ともよはき人つねに用ふれば、長寿する良薬にて、じんをとゝのへ目をあきらかにす。▲十三味薬あらひこ一つゝみ百三十二せん。第一いろを白くしきめをこまかにす。いかほどのあればだにても一度用ふればかんばせ玉のごとし。にきび、そばかす、やけど、すりこはしによし、いばはたびくあらへばおつる事うけ合なり。▲えりおしろいげいしやかう半えりへつかずあせにもおちず、

つぎへ▼▲



▲あくぬきばつちりのごく上なり。一つゝみ五十六せん。▲女はらみ薬、男大じ
 んやく、くわいにん丹一才五匁、半才二匁五分。女は五十い上たりとも月やくみる
 内ははらむ事妙なり。此くすりにてやゝさまうみ玉ひし御方あまたあり。男はかし
 らに霜をいたゞくともわかき人のごとくせいきをますことうけあひなり。▲此上な
 しのおしろい、にほひ入り、雲のうへ一つゝみ六十四せん。▲御かほの薬おしろい、
 白牡丹一つゝみ百せん。うすけしやうとしまの御方には妙なり。▲小児五かんの大
 妙薬、長生丸一つゝみ百せん○虫けにていろくくすり用ひてしるしなき時、
 此、丸薬をのませ玉へ。かならずしるしあるべし。むづかしき小児いくたりもたす
 け申候。
 霜香堂所蔵
 ちるものとお
 もへうき世の
 花ごころ
 秋色
 第五回
 かくて、ある日お初が母、妙せいがきげんきゝにとてきたり、ゐなか
 よりもらひしとて、次へ



妙せい

▲むぎこがしの粉一ふくろ、なましひたけちひさきかごにいらるを、おはつ八寸にのせ母がとていだしければ、妙せい、おはつがはくをちかくよびて、こゝろざしのれいをのべ、初に用もあらん、ちやのまにてゆるりとはなしやれ。初、にはなてもしてしんぜろ、くわしはこゝに、とをりのまゝ、あとはみやげにもつてゆきやと、こまこゝろつく妙せいはい人になさけをかけ、すぐりへんじをかいてるたりけり。

祐之

○おはつは母をちやのまへともなひ、はなししながらちやをいれなどしつゝ、つきものしかけたるはりばこのひきだしより、金百ひきとかきたる水引かけたをとりだし「母さん此おかねは妙せいさまがおつとめなされたおやしきのおのへさまから○いただきました。そのわけは、妙せいさまにお手本もらふおかたもあり、又はお歌をなほしておもらひなさるもあるゆゑ、その事をりくはわたしもおつかひにゆく事がござります。それゆゑかしてけさおやしきよりおつかひの時いたゞきまし

お初が母

下女お初

た。やがておへんじとりになるはづ、おれいはだんなさまからいふてやるとおつしやれた。母さん此おもしろくはおまへにあげます。なんぞたべたいものあがつて、いつまでもたつしやでゐてくださりませとさしだせば、こゝろざしのしほらしさに、母はほろりとうれしなみだにそでをぬらし、もくろくおしいたゞき、「こゝろざしはせんばんじやが、そなたじゆばんのそでか、まへかけでもかふたかよい」「いへくけさいたゞいたとき、おまへにあげたいとおもふたといひつゝ、やはりばこ

より次へ▲

「十六表



ふくとくや
つけとくべ

▼(更紗) さらさのきんちやくとりいだし、「母さんこれはわたしがぬみました。此きれはたんなさまのさふとんのあまりをいただきましたゆゑ、おまへのおあし入れにぬふておきました、とやるはうれしくもらふはなみだ。妙せいは小用のかへりに立きくとはなく、おはつが母に孝なるをかんじけり。●おはつかやうなる心ゆゑ、はからず身にさいはひある事次にしるす。

○第六回 かゝるをりしも「とくべゑでござります、と妙せいがきげんきゝにきたりしは、妙せいがをつとさいせのころみせのばんたうをつとめたるが、のれんをもらひてみせをいだし、今はとくの介とてことし十九のせがれもあり、くらも二ツありて、もち地めんにするまひするほどのものなりけり。●妙せい「こりやとくべゑどのめづらしい。これ、はつや、とよばれてそれとさとり、たばこぼん、ちやをはこぶおはつがとりなりをとくべゑ目をつけてみる。これには心ある事なり。やがておもやの下女、大きなさらへ○まぜさかなならべたるをもちきたり、「これはとくべゑさまおみやげとさしいだせば、妙せいいいをのべければ、とくへゑ「いや、みちにて④みかけましたゆゑ、心ばかりおひるのおかずにあがります。妙せい「あじはわしがすき。今もらひたるなましひたけもあり、うちよりてたべませふ。わろくならぬやうにひや水へつけておけと、しひたけもそへてやりけり。とくへゑは、つねなみのなしのうち、おはつが母いとまごひしてかへらんとするを、妙せい「たのみたき用ありとてひきとめければ、又ちやのまへたちけり。妙せいがひきとめたる心は、今きやくがきたりしゆゑひとり女のお初に用もあらんとてにはかに母のかへるならん。久しぶりにてむすめにはなしもあるべくおもひ、一ツには今もらひたるさかなにてひるめしむくはせてかへさんの心なり。これもお初がよくつとむるゆゑ、母にまでめぐみのおよばさるゝなりけり。されば、ほう公はたいせつにすべし。かろきもおもきも、これにたがふ事なかるべし。●さてとくべゑ、すこしこゑをひそめ、「もしあのお初がやどは



お初があに
ことのしなん
としのいち

▲なにものでござります。妙せい「今ちやのまへきてをるが初が母おや。ていしは、十年ばかりいぜんうせたそうな。むかしはよくくらしたものであつたそうなが、しあはせあしく、今では初があにを、としの一とて琴のしなんして母をやしなふ。わしが所へも二、三どよびてことをきゝしに、こゑもよきゆゑ、さしきもあるげなこゝろだてもやさしく、才ちもあるゆゑ、ししやうのかはりけいこにもあるき、でしもちかころはふへたさうな。とく丁のしんみちにて、おや子に下女ひとりのくらしじや。●とくべゑひぎをすゝめてまたこゑをひそめ、」ときに御いんきよさま。あのお初をとくの介がよめにもらひたうござりますがどうでござりませう。「それは内かたもとくしんか。「さやうでござります。あれが申すすには十二のとしから六年、御いんきよさまにしこまれたお初、さとはには○かまはぬ、あなたをおたのみ申せと申ました。「わしがつかふ下女、とくの介がふそくにおもはん。「いへくあれにも申きかせましたれば、いかさまよろしからん。よい所からもらふては、つきあひがふへても入りのあり、おまへがたも心づかひ、わたくしもつかひにくひと申す。「いかさまとくが申すはもつともじや。つかひなれた初をはなしては、さしあたりてわしがこまるけれどほかではなし。こなたの事、又はつがしあはせなり。をりよく母もきてをるからはなしてみん。しかし、とてもしたくはできぬぞや。「そりや、がてんでござります。わたくしおもふには、こなたへひさしく○おでいりなさるさちあんさまのむすめにしてもらひませうとぞんじます。「いかさまあの人はせわすきじや。はつをよめならわしがうけあひ。きよねんからきうきんでつかふに、その内から月にすこしづゝ母に小づかひおくる。わしが手本かいてやりしに、今もつてよるゝわしがねてから手ならひする。わしがきるもののおほかたはあれがしたてる。又、おやしきへつかひにやりても長口上一ツもわすれず。あさはわしよりさきへおきる。一度でもあれをおこした事がない。うまれつきもあのやうじやゆゑ、みせのものがあだめくことばかけるさうなが、それがいやじやとてわしが用のほか



おはつ

▲このいんきよじよをでた事がない。よそからくるうつりかみ^{（無）}をためておくゆゑ、なにをするやらんとおもひしに、わしが小そでのえりがみにした。そのしまつ^{（始末）}にはかんしんした。わつか十七でかやうな事に心がつけば、ゆく／＼しんしんだいのためにもならん。それゆゑ、わしがうけあひじやといふのじや。とくべゑはこれをきゝて、いよく／＼ほしくなりしはことほりぞかし。

その二

「ときに御いんきよさま、きうにはできますまいか。」そりやできぬ事はあるまい。みあひするではなし、とくが男ふりはつも^{（初）}しつてなり。母とあにさへとくしんならできる事じや。それにしても、こちのだんなふうふへもさうだんしてみるがよい。「じつは、せんこくおふたりへも〇〇はなしました。とかくいんきよをたのめとおつしやりました。」それならせんはいそげじや。今、母にはなしてみん。日からはどうじやしらんと〇〇こよみとりいだせば、とくべゑ「いやこよみもみてまゐりました。けふは吉日でござりますとはなしのをりから、「さちあんおみまひ申すときたり、あひさつをはり、」ときに妙せいさま、よんどころないところからたのまれました。八十八の賀の歌^{（首）}一しゆおよみなされてくださりまし。」それはめでたい。男か女中か。「やはりおまへのやうなめでたい女のいんきよ。いねにやすういはひといふだいでござります。」いかさま八十八をよねのいはひといふから、いねによするはおもしろい。●さちあん「さてとくべゑさん。今だんなにきいたよめの事、わしがむすめにもらひさとなつてやりませう、ときいてとくべゑ大によろこび、妙せい、お初も母もこゝへよび、しか／＼のよいひければ、母は^{（半下）}ひげしてしたいするを、さちあんやる心ならばんじわしにまかせ玉へとさうたんめでたくきはまりたる時、とくべゑかみやげのさかなにてぜんをもちきたり、さちあんはのむ口ゆゑさけもいで、

「十九表



おのへ



▲お初が母へもぜんをすゑ、あらためてさちあんとかさづきをなしけり。

妙せい

○第七回 かくておもやのあるじふうふもこへきたり、やうすをきゝてともどもよろこび、これまで妙せいに忠義をつくしよくいたはりたるはうびとて、万右衛門よりよめいりしたく金子をとらせければ、万右衛門がつまも妙せいもいるいなどつかはしければ、したくもふそくなく、おはつはさらなり。母もあにのとしのい

さちあん

ちもしゆじんの太おんをありがたがりけり。○さておはつ、さちあんをさとしにして、うつくしき男のとくの介がつまとなり、下女三人つかふ身とぞなりける。これま

とくへゑ

たく忠孝の二ッに心をかたむけたるゆゑ、人にも天にもめぐみをうけたるなりけり。○これには事ははりて、かのおさんはふくとくやよいいとまをだされ、すぐさま母につれられてざいしよへかへり、むことさかづきたるにふうふなかむつまじからず。そのはず也。おさんはすこしのでんはたをわがものとおもひてむこそおとしめ、

むこはおさんをつまなりといやしめけるゆゑ、まい日のふうふいさかひ母のいけんへちまとも思はず、母になみだおとさす事あさゆふ也。母がしんくしたる手おりも

註5

めん、市にはぜにせんとなし、いつか○男をこしらへ、としよりの母をすて、かけおちしけるに、此男わるものなれば、つひにはめしもりをうられ、うきつとめをなしけり。

おさん

おはつはこれにひきかえ、ごしんぞさまとよばれてめでたくいはたおびをしめけるは孝しんのなすところ。○おさんがすべたといやしめられて、したひもをとくはふ孝ゆゑ也。孝と不孝の身のなりゆき、玉とかはらのごとし。おそるべし、つゝしむべし。

お初が母

は孝しんのなすところ。○おさんがすべたといやしめられて、したひもをとくはふ孝ゆゑ也。孝と不孝の身のなりゆき、玉とかはらのごとし。おそるべし、つゝしむべし。

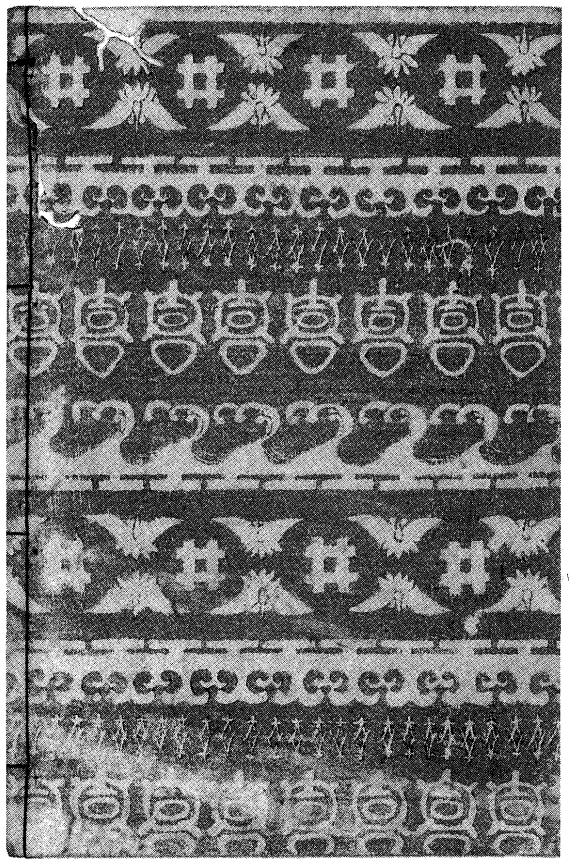
孝女お初

佐野屋喜兵衛板



佐野屋喜兵衛板

—(77)—



(裏表紙の刷色は茶色)^{註6}

三編 註

- 註1 長寿を願うため、髪の上にのせた蔓草。
 註2 髪。左右に垂らした髪。毛の束。
 註3 三編下に祐之の歌があるところから、久松祐之と考えられる。久松祐之、五十之助。安政・文久頃の国学者・歌人。江戸の生まれで、江戸幕府旗本の家臣。小林歌城の門人。
 註4 俳人。寛文九年(一六六九)〜享保十年(一七二五)か。菊后亭と号した。江戸の老舗菓子屋に生まれ、宝井其角の門。
 註5 少しも意に介しない、の意。
 註6 第三編下の初刷りの裏表紙の刷色は青色。(市立米沢図書館所蔵本による。)
 註7 第三編下裏表紙見返しの翻刻を下に掲げた。(市立米沢図書館所蔵本による。)

(やなぎ ひでこ 文化創造学科)
 (おが い まさこ 現代教養学科)
 (ひら い きよし 学長・近代文化研究所所員教授)

三編下裏表紙見返し^(註7)

| | | | |
|---|---------------------------------|--|---|
| <p>きやうくんのとさうし 教訓乳母草紙 一勇斎国芳画</p> | <p>山東京山作 初編二編</p> | <p>前太平記 編記</p> | <p>とをかすみへいあんじやう 遠霞平安城 全四冊 歌川国芳画</p> |
| <p>さんあとおひばなし 同三編跡追話 二代一陽斎豊国画</p> | <p>同 作 全四冊</p> | <p>つなぎむさるしまたいり 同二編 驢猿嶋内裏</p> | <p>同 撰 同 画</p> |
| <p>べにあうりむかしふうぞく 紅粉絵売昔風俗 墨川亭雪麿作 全六冊 溪斎英泉画</p> | <p>同 断 同 画</p> | <p>ねんりきゆんげいのほまれ 同三編 念力弓勢誉</p> | <p>同 断 同 画</p> |
| <p>さいごく 西国つき 月の夜神楽 初編二編 初 国芳画 二英泉画</p> | <p>五柳亭徳升作 初編二編</p> | <p>しんらばんじやうたることばなし 森羅万象多異事雑談 全四冊 此さうしはきんぢう虫魚をはしめさうもくきさいのるひまで おのくそのふんげんによってえい枯世いすいをかたおかしさうし也</p> | <p>西馬戯作貞重画 全四冊</p> |
| <p>えほんくすのきいちだいき 絵本楠一代記 歌川国芳画</p> | <p>鳥有山人作 全五冊</p> | <p>東都芝神明前三島町角</p> | <p>佐野屋喜兵衛発行</p> |

「三編下裏表紙